

昭和61年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

三尻遺跡群 庚申塚遺跡・松原遺跡

1 9 8 7

埼玉県熊谷市教育委員会

序文

熊谷市は埼玉県北部の中心であり、歴史的にもゆかりの深い地域であります。三尻地区は、市域の西部にあたり、大字三ヶ尻・拾六間・新堀新田の3地域を合わせた旧三尻村であり、縄文時代から歴史時代にわたる集落跡、多くの古墳、中世の館跡、墓地跡などの存在が知られています。

三尻地区には、市指定文化財の名勝である觀音山があり、孤立した丘陵で、松林におおわれています。この觀音山の北側には三ヶ尻古墳群があり、24基の古墳が確認されている中で、5基が調査され、多くの遺物が発見されています。

当地区では、昭和56年度から県営は場整備事業が継続して実施されています。本市教育委員会では、この事業に伴い、発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、昭和60年度に実施された庚申塚遺跡、松原遺跡の発掘調査の成果をまとめて報告するものです。

遺跡は、貴重な文化遺産として、後世に残すことが第一に計られるべきですが、工事の性格上やむをえず、記録保存の方策をとることとなりました。

発掘調査によって得られた資料は、貴重な文化遺産として、学術研究、学校や社会教育に資するものであると考えます。こうした調査・報告を契機として、多くの市民の方々が、埋蔵文化財保護について、より一層のご理解とご協力くださることを願ってやみません。

最後になりましたが、県文化財保護課、深谷土地改良事務所、熊谷西部土地改良事務所、地元三尻地区住民の方々からご指導・ご協力いただきましたことに、深く感謝の意を表します。

昭和62年3月

熊谷市教育委員会
教育長 関根幸夫

例 言

1. 本書は、埼玉県熊谷市大字三ヶ尻字松原に所在する庚申塚遺跡と松原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県営ほ場整備事業（熊谷西部地区）に伴う事前記録保存の為の発掘調査である。
3. 庚申塚遺跡は、国庫・県費補助事業により、松原遺跡は、深谷土地改良事務所の委託事業により、それぞれ調査を実施した。
4. 発掘調査期間は下記のとおりである。

庚申塚遺跡 昭和60年11月16日～昭和61年1月14日

松原遺跡 昭和60年8月5日～11月15日

5. 発掘調査の担当、本書の執筆・編集は金子正之が行った。
6. 発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長	関根幸夫
調査担当者	社会教育課主事	金子正之
事 務 局	課長	岡田 詮（現 教育次長）
	課長補佐	茂木 優（現 社会教育課長）
	係長	北 俊明
	主査	山川 建
	主事	寺社下博
	○	米澤ひろみ

7. 人骨・馬歯・馬骨鑑定は、早稲田大学考古学研究室金子浩昌氏にお願いし、玉稿をいただいた。
8. 庚申塚遺跡の土層中の火山灰については、埼玉大学教授堀口萬吉氏に御教授を受けた。記して感謝いたします。
9. 陶磁器については、浅野晴樹氏に御教授を受けた。記して感謝いたします。
10. 庚申塚遺跡の基準点の座標は、No.1はX=17,090m, Y=-44,825m, No.2はX=17,070m, Y=-44,825mである。
11. 松原遺跡の基準点の座標は、No.1はX=16,910m, Y=-45,160m, No.2はX=16,935m, Y=-45,145mである。
12. 遺物の写真撮影は、寺社下博が行った。
13. 遺構平面図の中で、土壙・土葬墓はD、火葬墓はKと記号化した。
14. 遺構図と写真図版の遺物の番号は、挿図番号を示す。例えば、1—2は第1図の2の遺物をさす。
15. 遺構図の中で、土器片はT、川原石はS、焼土ブロックはF、炭化物はCと記号化した。
16. 遺構平面図の中で、■は古銭、○は骨、▼は土器その他の遺物を示し、遺物実測図の中で、■は釉、■は煤を表現している。
17. 本文中の「どころ」について、骨が検出されたものは「土壤」、骨が検出されなかったものは「土壙」と漢字を使い分けた。

目 次

序文	I
例言	II
目次	III
挿図目次	IV
図版目次	V
I. 発掘調査に至るまでの経過	1
II. 発掘調査の経過	1
III. 遺跡の立地と環境	2
IV. 庚申塚遺跡	4
1. 遺跡の概観	4
2. 遺構と遺物	5
V. 松原遺跡	21
1. 遺跡の概観	21
2. 遺構と遺物	22
VI. 庚申塚遺跡及び松原遺跡出土の馬歛・馬骨・人骨について	33
早稲田大学考古学研究室 金子浩昌	
VII. まとめ	38

挿図目次

第1図 遺跡分布図	第24図 7号土塚
第2図 遺跡位置図	第25図 8号土塚
第3図 庚申塚遺跡地形測量図	第26図 グリッド・一括出土遺物
第4図 庚申塚遺跡全測図	第27図 松原遺跡位置図
第5図 庚申塔	第28図 1号土葬墓
第6図 庚申塚平面図	第29図 松原遺跡全測図
第7図 庚申塚断面図	第30図 2号土葬墓
第8図 庚申塚集石遺構	第31図 3号土葬墓
第9図 庚申塚上出土遺物	第32図 4号土葬墓
第10図 庚申塚上出土古銭	第33図 4号土葬墓出土古銭
第11図 庚申塚土製人形出土状態	第34図 5号土葬墓出土古銭
第12図 庚申塚出土土製人形	第35図 5号土葬墓
第13図 庚申塚埋葬施設	第36図 6号土葬墓
第14図 庚申塚埋葬施設出土遺物	第37図 6号土葬墓出土古銭
第15図 庚申塚埋葬施設出土古銭(1)	第38図 4・5・6号土葬墓及び一括出土遺物
第16図 庚申塚埋葬施設出土古銭(2)	第39図 7号土葬墓
第17図 馬埋葬遺構出土遺物	第40図 8号土葬墓
第18図 馬埋葬遺構出土古銭	第41図 9号土葬墓出土古銭
第19図 馬埋葬遺構	第42図 9号土葬墓
第20図 1号土塚	第43図 1号火葬墓
第21図 2号土塚	第44図 2号火葬墓
第22図 3・4・5号土塚	第45図 2号火葬墓出土古銭
第23図 6号土塚	第46図 3号火葬墓

図版目次

図版1	庚申塚・松原遺跡航空写真	図版7-1	庚申塚埋葬施設
2	庚申塚遺跡航空写真	2	馬埋葬遺構
3-1	庚申塚遺跡遠景(西側から)	8-1	土製人形出土状態
2	庚申塚遺跡遠景(南側から)	2	土製人形
4-1	庚申塚遺跡	3	土製人形
2	庚申塚・馬埋葬遺構	4	煙管
5-1	庚申塚	5	庚申塚埋葬施設出土遺物
2	庚申塚	6	庚申塚埋葬施設出土遺物
6-1	庚申塔	7	庚申塚埋葬施設出土古銭
2	庚申塚	8	庚申塚埋葬施設出土土器

図版 9—1	馬埋葬遺構出土遺物19—120、121	図版14—5	3号土葬墓
2	馬埋葬遺構出土遺物19—122	6	3号土葬墓
3	馬出土状態19—114～119	7	4号土葬墓
4	馬出土状態19—123～130	8	4号土葬墓
5	馬出土状態19—140～153	15—1	5号土葬墓
6	馬出土状態19—140～145	2	5号土葬墓
7	馬出土状態19—1	3	6号土葬墓
8	馬出土状態19—1	4	6号土葬墓
10—1	馬出土状態19—3	5	6号土葬墓
2	馬出土状態19—142、145～150	6	6号土葬墓
3	馬出土状態19—3	7	6号土葬墓
4	馬出土状態19—5～13	8	8号土葬墓
5	馬出土状態19—11、12	16—1	7号土葬墓
6	馬出土状態19—17	2	7号土葬墓
7	馬出土状態19—17	3	7号土葬墓
8	馬出土状態19—131～139	4	7号土葬墓
11—1	馬出土状態19—26、28、29、33～90	5	9号土葬墓
2	馬出土状態19—112、113	6	9号土葬墓
3	馬出土状態19—60～62、64～74、78～90	7	9号土葬墓
4	馬出土状態19—112	8	3号火葬墓
5	馬出土状態19—11～13	17	庚申塚上出土遺物
6	馬出土状態19—18～32	18	庚申塚上出土遺物
7	馬出土状態19—28、33、34	19	庚申塚上・埋葬施設出土遺物
8	馬出土状態19—25、27、30～32	20	庚申塚埋葬施設出土遺物
12	松原遺跡航空写真	21	庚申塚埋葬施設出土遺物
13—1	松原遺跡遠景	22	馬埋葬遺構、松原遺跡グリッド・一括、 4・5号土葬墓出土遺物
2	松原遺跡全景	23	4・5・6号土葬墓出土遺物
14—1	1号土葬墓	24	5・6・9号土葬墓、2号火葬墓及び一 括出土遺物
2	1号土葬墓		
3	2号土葬墓		
4	3号土葬墓		

I. 発掘調査に至るまでの経過

熊谷市は、昭和56年度から三尻地区において、埼玉県営は場整備事業が実施され、埋蔵文化財を記録保存するため、継続的に発掘調査を行っている。

昭和60年5月22日付深地第427号で埼玉県深谷土地改良事務所から、県営は場整備事業熊谷西部地区内にある埋蔵文化財の取り扱いについて協議文書が提出され、昭和60年6月5日付教文第291号において埼玉県教育委員会から、発掘調査を実施する旨回答がなされた。

これを受けた熊谷市教育委員会が、国庫・県費補助金・農政負担金および市費をもって調査を実施することになった。

事業計画による工事は、微高地上にある桑畠の抜根整地、水田の整地および道水路のパイプ埋設工事であった。面的に削平される部分は、トレンチ調査によって土層堆積状態、遺跡範囲の確認をしてからグリッド方式で調査を行い、水路部分は、トレンチ調査により発掘を実施することとした。

発掘調査は、昭和60年8月5日から開始された。

II. 発掘調査の経過

松原遺跡は、地元の人達に「馬捨て場」と呼ばれており、直径約13m、高さ70cmの塚があり、は場整備によって削平されるので、調査を実施した。

まず、塚の地形測量を行い、塚の形・大きさを調べてから、トレンチを入れて土層堆積状態・遺跡範囲の確認を行った。塚には明治3(1870)年の馬頭観音が建てられていて、かつて馬を埋葬していたのではないかと思ったが、トレンチ調査をすると最近の不燃物のゴミ(バケツ・ドリンクの瓶・ふとん・茶碗等)や動物の骨が出でたので、塚の精査を中止し、塚の南側の調査を実施した。

塚の南側は、重機によって表土剥ぎを行った後、1辺5mのグリッド方式を用いて調査を行った。南西隅をA-1として、北へ1, 2, 3…、東へA, B, C…とし、Aラインは、南から北へA-1, A-2, A-3…と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称してグリッド設定を行った。

重機による表土剥ぎの後にも、人力によって表土剥ぎを行って、遺構の確認を行った。遺構確認面の精査を実施し、土葬墓・火葬墓を確認した後、各遺構ごとに調査を実施した。

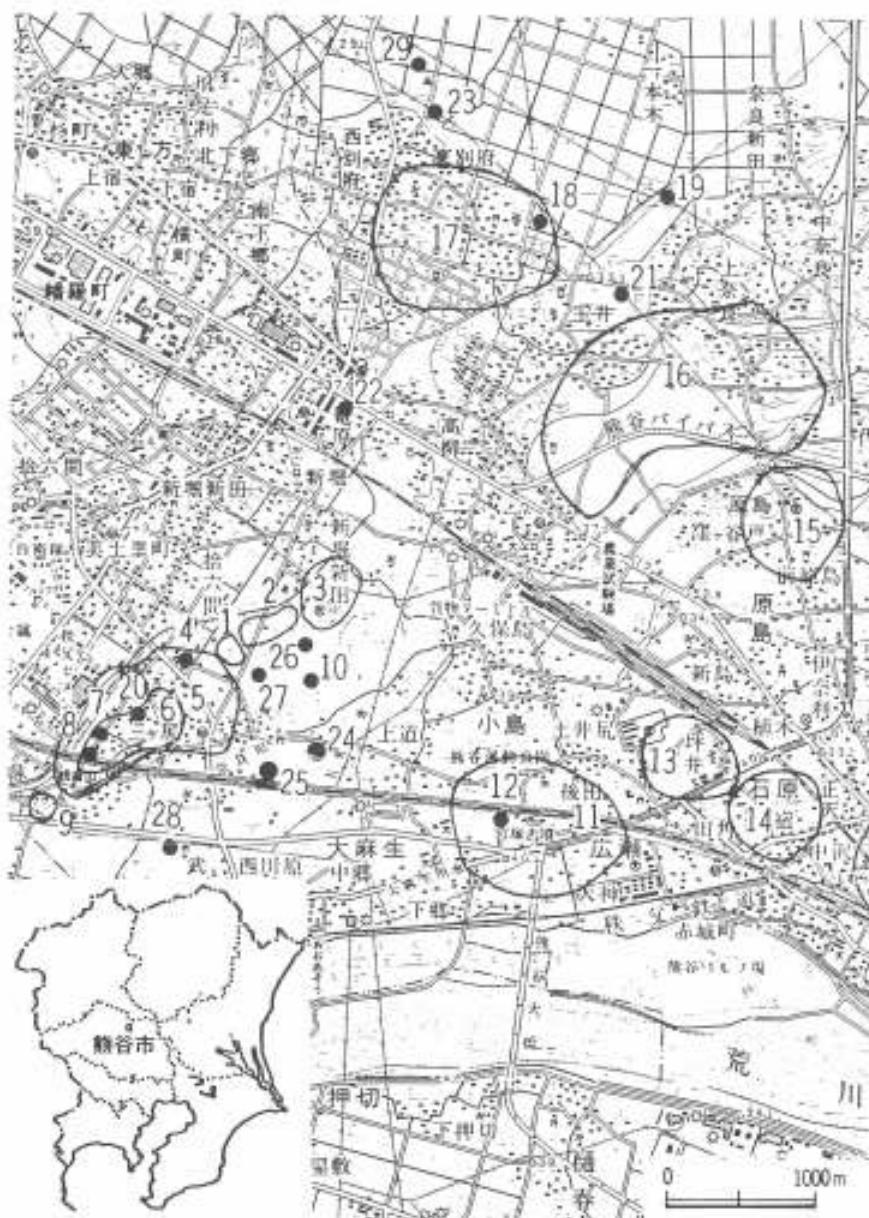
松原遺跡からは、土葬墓9基、火葬墓3基が検出され、陶磁器、かわらけ、古銭が出土した。

庚申塚遺跡は、延宝8(1680)年の庚申塔が建てられている塚が削平されるので、調査を実施した。松原遺跡と同様に、塚の地形測量を行ったのち、トレンチ調査を実施した。

塚の部分は、人力によって掘下げたが、塚の南側は、重機によって表土剥ぎを行い、1辺5mのグリッド方式を用いて調査を行うため、松原遺跡と同じ呼称の方法を用いてグリッド設定を行った。

庚申塚遺跡は、天明3(1783)年の浅間山の火山灰が遺跡全体に降積もっており、塚の部分は、火山灰層を取り除いた段階で、もう一度地形測量を行い、更に掘下げ、埋葬施設の精査を行った。塚の南側は、火山灰層直下の面から遺構が確認できたので、火山灰層まで重機により掘下げ、遺構確認面の精査をして遺構を確認したのち、各遺構ごとに調査を実施した。

庚申塚遺跡からは、庚申塚1基・馬埋葬遺構1基・土塙8基が検出され、馬埋葬遺構からは多量の馬歯・馬骨が出土した。本調査によって、近世の遺構・遺物が検出され、昭和61年1月14日に調査は終了した。



1. 上辻遺跡
2. 下辻遺跡
3. 桶ノ上遺跡
4. 三尻中学校遺跡
5. 59—63 (県遺跡地名表番号)
6. 三ヶ尻古墳群
7. 三ヶ尻天王遺跡
8. 三ヶ尻林遺跡
9. 59—64 (県遺跡地名表番号)
10. 黒沢館跡
11. 広瀬古墳群
12. 宮塚古墳
13. 坪井古墳群
14. 石原古墳群
15. 原島古墳群
16. 玉井古墳群
17. 別府古墳群
18. 寺東遺跡
19. 天神遺跡
20. 三ヶ尻上古遺跡
21. 新ヶ谷戸遺跡
22. 龍原裏遺跡
23. 石田遺跡
24. 庚申塚遺跡
25. 松原遺跡
26. 東遺跡
27. 若松遺跡
28. 社裏遺跡D区
29. 横間栗遺跡

第1図 遺跡分布図

III. 遺跡の立地と環境

庚申塚遺跡は埼玉県熊谷市大字三ヶ尻字松原 289 番地他、松原遺跡は埼玉県熊谷市大字三ヶ尻字松原 231 番地他に、それぞれ所在しており、両遺跡とも、国鉄高崎線龍原駅の南方約 2 km、利根川から南へ約 8.5 km、荒川から北へ約 1.5 km のところにある。

庚申塚遺跡・松原遺跡の所在する三尻地区は、熊谷市の西部にあたり、西側に樋引台地があり、東側には熊谷低地が広がっている。本地域は、何本もの水路が南西から北東へ走っており、かつて河川の氾濫が数多くあったことを物語っており、自然堤防もよく発達しており、遺跡は自然堤防上に立地している。

庚申塚遺跡は、標高42~43mを測り、畑地となっていて、松原遺跡は、標高43m前後であり、畑地・桑畠となっていた。

最近の開発に伴い、三尻地区及びその周辺で新しく発掘調査された遺跡について、その調査結果の概要を述べ

て、本遺跡の歴史的環境としてみたい。

本遺跡の西側には、三ヶ尻古墳群（6）、三ヶ尻天王遺跡（7）、三ヶ尻林遺跡（8）、三ヶ尻上古遺跡（20）等があるが、三ヶ尻天王遺跡は熊谷市立三ヶ尻小学校のプール建設に伴い昭和61年5月～9月にかけて調査が行われ、縄文時代中期～後期の住居跡・土塁、埋甕、古墳時代後期の住居跡、室町時代の土葬墓群・ピット群・集石遺構等が検出され、縄文時代中期の有孔鈎付土器も出土した。（注1）

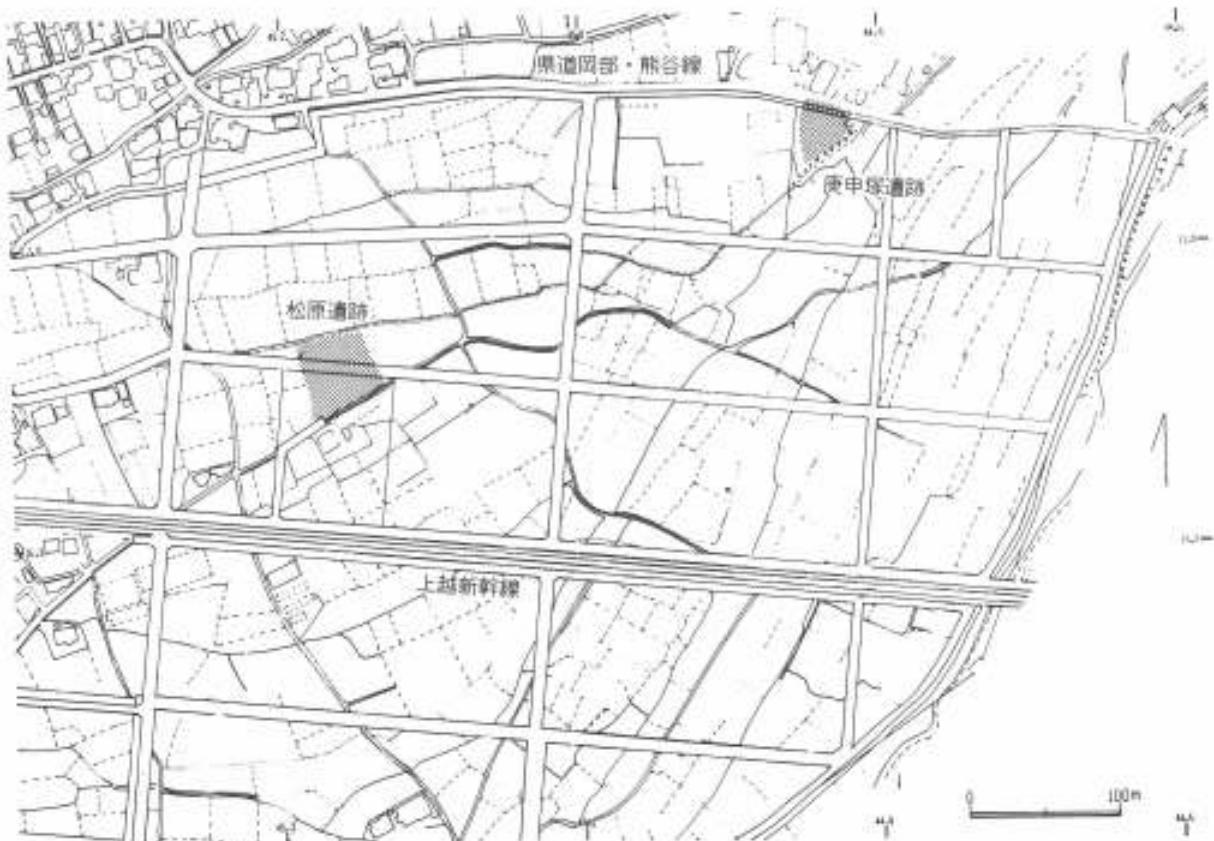
南西方向には、社裏遺跡（28）があり、埼玉県営ほ場整備に伴い昭和61年度に調査が実施され、A～E区の4区が発掘された。中世・室町時代の多数の土葬墓と数基の火葬墓・集石遺構が検出された。

北方約2.2kmの位置には、八角形の周溝をもつ古墳が検出された籠原裏遺跡（22）があり、区画整理事業の道路建設に伴い、昭和61年8月～9月にかけて発掘が行われ、古墳3基・平安時代の住居跡2軒、同時代のピット等が検出された。

籠原よりさらに北の別府地域においても調査が実施されており、昭和60年9月～昭和61年3月まで、熊谷市立別府小学校建設に伴い石田遺跡（23）が発掘され、縄文時代中期の住居跡・土塁・埋甕や埋没河川・沼地跡が調査された。別府衛生センターの拡張工事に伴い、横間栗遺跡（29）の調査も昭和62年1月から実施されており、縄文時代後期の土塁が数多く出土し、古墳時代前期の住居跡・溝跡等も検出されている。

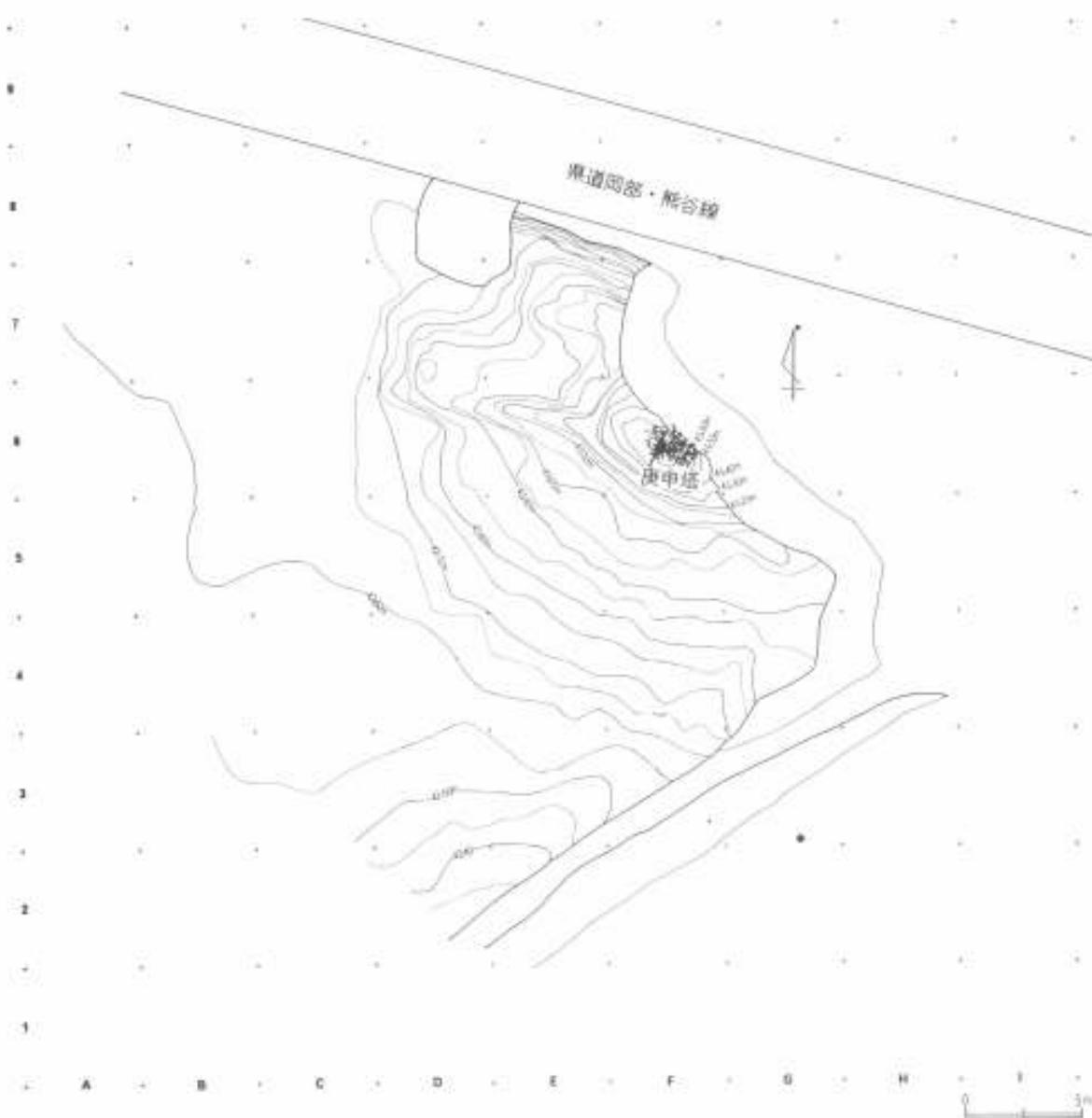
注1、三ヶ尻天王遺跡は、昭和53年度に埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を行っており、古墳6基・古墳時代後期の住居跡7軒・竪穴状遺構4基・掘立柱建物跡3棟・土塁90基・溝2本・ピット群等が検出された。今年度調査を実施した場所は、県の調査区の東方約200mの所に位置している。

小久保徹・田中英司・利根川章彦他『三ヶ尻天王・三ヶ尻林（1）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告集第23集 昭和53年



第2図 遺跡位置図

V. 庚申塚遺跡



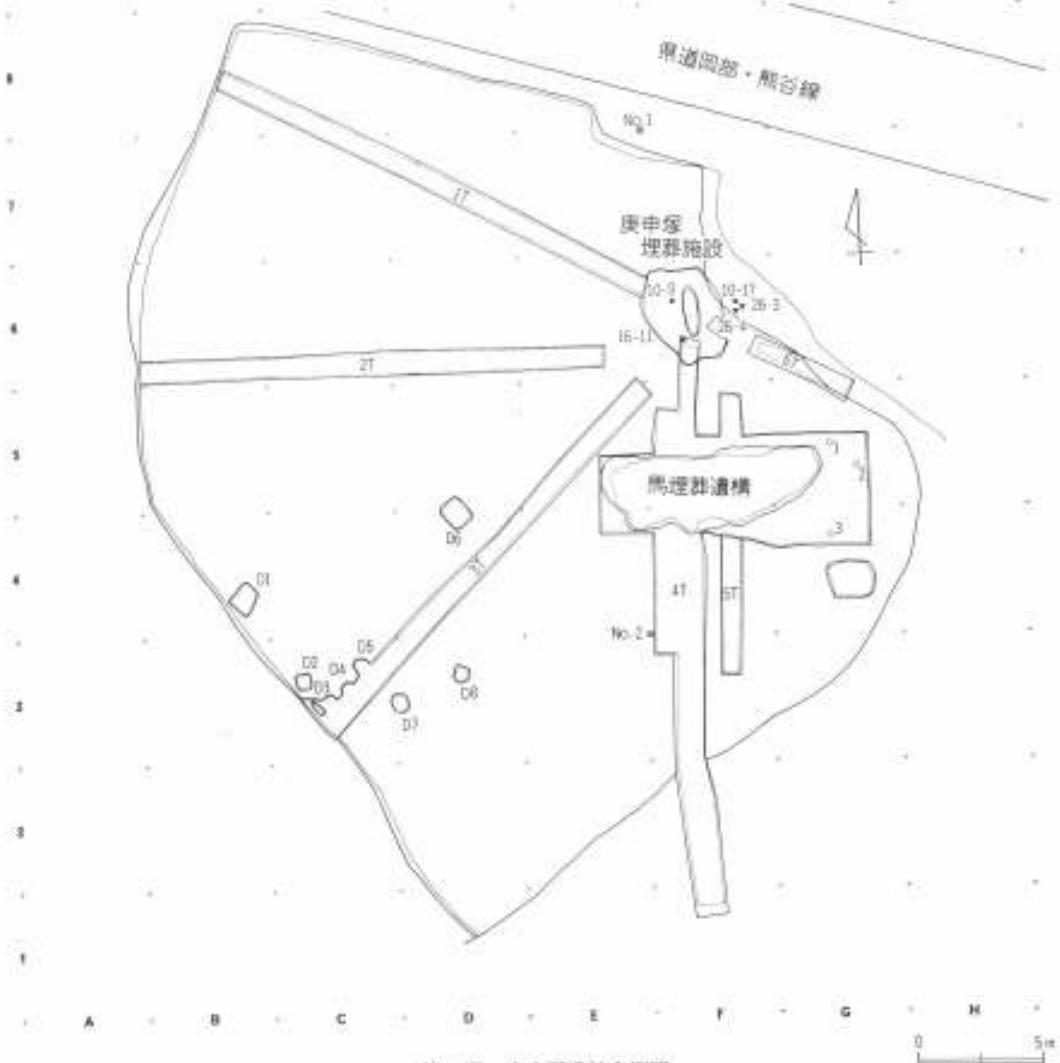
第3図 庚申塚遺跡地形測量図

1. 遺跡の概観

庚申塚遺跡は、国鉄高崎線龍原駅から南へ約2km、荒川から北へ約1.5kmの所にある。荒川左岸の自然堤防上に立地し、標高42~43mを測る。

本遺跡は、延宝8(1680)年の庚申塔が建立されている庚申塚が削平されることにより、調査を実施した。今回の発掘によって、庚申塚1基・馬埋葬遺構1基・土塙8基が調査された。

庚申塚は、方形を呈し、2段に築かれており、火葬墓の埋葬施設を有していた。馬埋葬遺構は、庚申塚の南に検出され、長径8.6m、短径3.1mを測り、不整長楕円形を呈していた。馬歯・馬骨が原位置を残さず検出され、何度も馬が埋葬されたことが考えられる。土塙は、方形を呈し、掘込みは浅いものであった。



第4図 庚申塚道路全測図



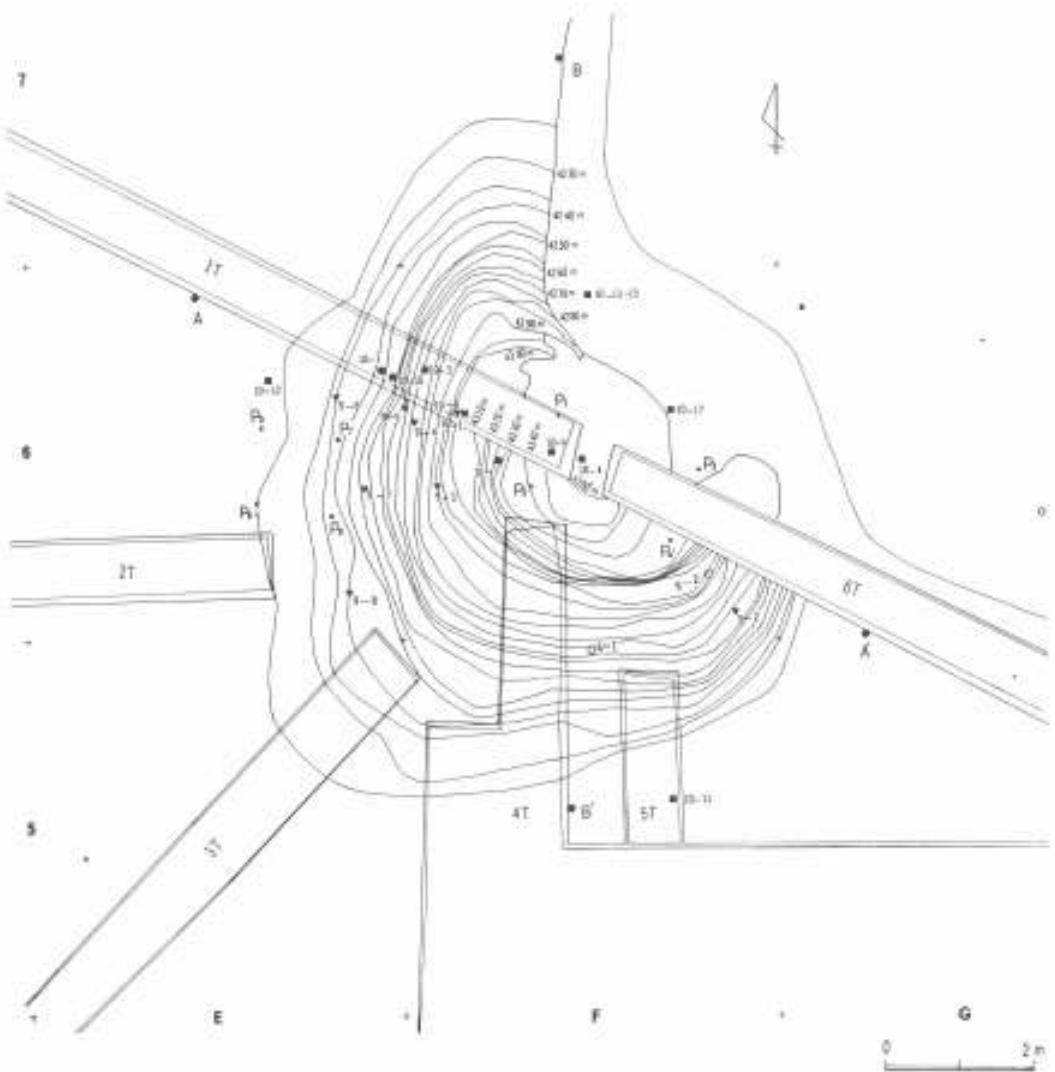
第5図 庚申塔

2. 造構と遺物

庚申塚 (第5~16図、図版5~7)

位置 庚申塚は、県道岡部・熊谷線の南側に接しており、調査区の北東部に位置していた。平面形は方形を呈し、二段に築かれていた。塚の北東部が削平されていたが、全体の約 $\frac{2}{3}$ が残っていた。主軸はN-23°Eを示し、川原石を積んで構築されていた。

塚上には、青面金剛の庚申塔が建てられ、石臼を含む川原石



第6図 庚申塚平面図

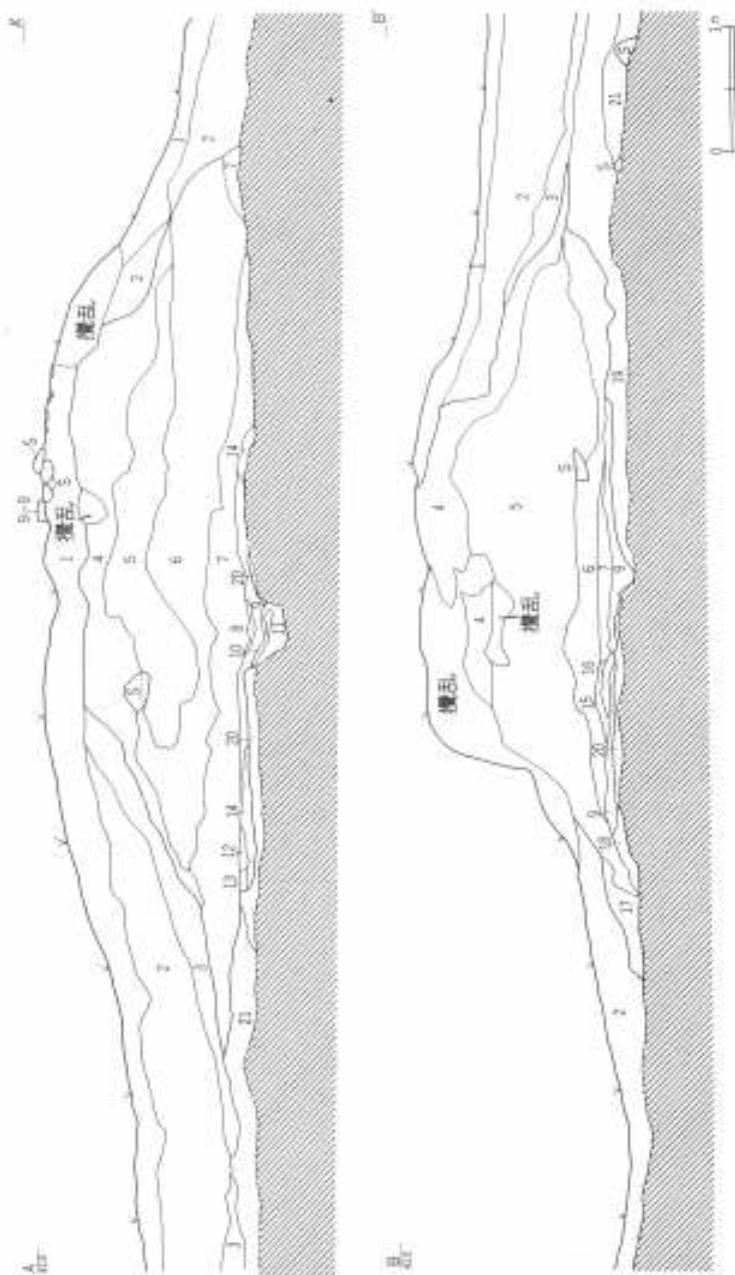
の集石造構内にあった。

塚の西側裾部には、土製人形が集中して出土し、塚中心部からは埋葬施設の火葬墓が検出された。

土層は、1層が表土、2層が褐色土（火山灰を含む）、3層が褐色土（火山灰を多く含む）、4層が褐色土（礫を多く含む）、5層が砂礫層、6層が砂礫層（褐色土を含む）、7層が褐色土（礫を少し含む）、8層が暗褐色土（炭化物を多く含み、骨片も含む）、9層が暗褐色土（炭化物・骨片を含む）、10層

が暗褐色土（褐色土・炭化物を含む）、11層が黒褐色土（炭化物を多く含み、骨片も含む）、12層が暗褐色土（炭化物を少し含む）、13層が灰褐色土、14層が褐色土（炭化物を含む）、15層が暗茶褐色土、16層が暗褐色土（炭化物・骨片を少し含む）、17層が褐色土（礫を少し含む）、18層が褐色土（炭化物を含む）、19層が褐色土（礫を含む）、20層が褐色土、21層が褐色土（礫を多く含む）であった。

3層は、天明3（1783）年の火山灰を多く含み、4層より下の層からは火山灰が検出さ



第7図 庚申塔断面図

れど、庚申塔が天明3年以前に築造されたことが考えられる。

規 模 断面A-A'の径7m。
高さ1.7m。

遺 物 塔上から陶器・かわらけ・煙管・古銭・馬骨等が出土した。庚申塔は、塔上にあったということ、ここで述べる。

庚申塔一本尊は青面金剛であり、三猿が青面金剛の下に彫られている。高さ1.6m、塔部最大

幅0.51m、塔部最大奥行長0.32m、台部最大幅0.57m、台部最大奥行長0.58mを測る。スクリーントーンの貼ってある所は、欠損部分である。銘文は、「奉建立庚申供養石塔 一基□二世安樂 施主二百拾人 (延) 宝八庚申天三月一日 武州潘羅郡三ヶ尻村」である。

9-1-大平鉢(类型)。標高42,239mから出土。高台径15.9cm、残存高2.3cm。細粒砂を含み、焼成は良好で、地の色調は灰白色を呈す。釉は灰釉である。底部の15%が残存している。

9-2-小皿。標高42,308mから出土。口径10.8cm、高台径5.9cm、器高2.7cm。焼成は良好で、地の色調は灰白色を呈す。釉は長石釉であり、残存率は30%である。

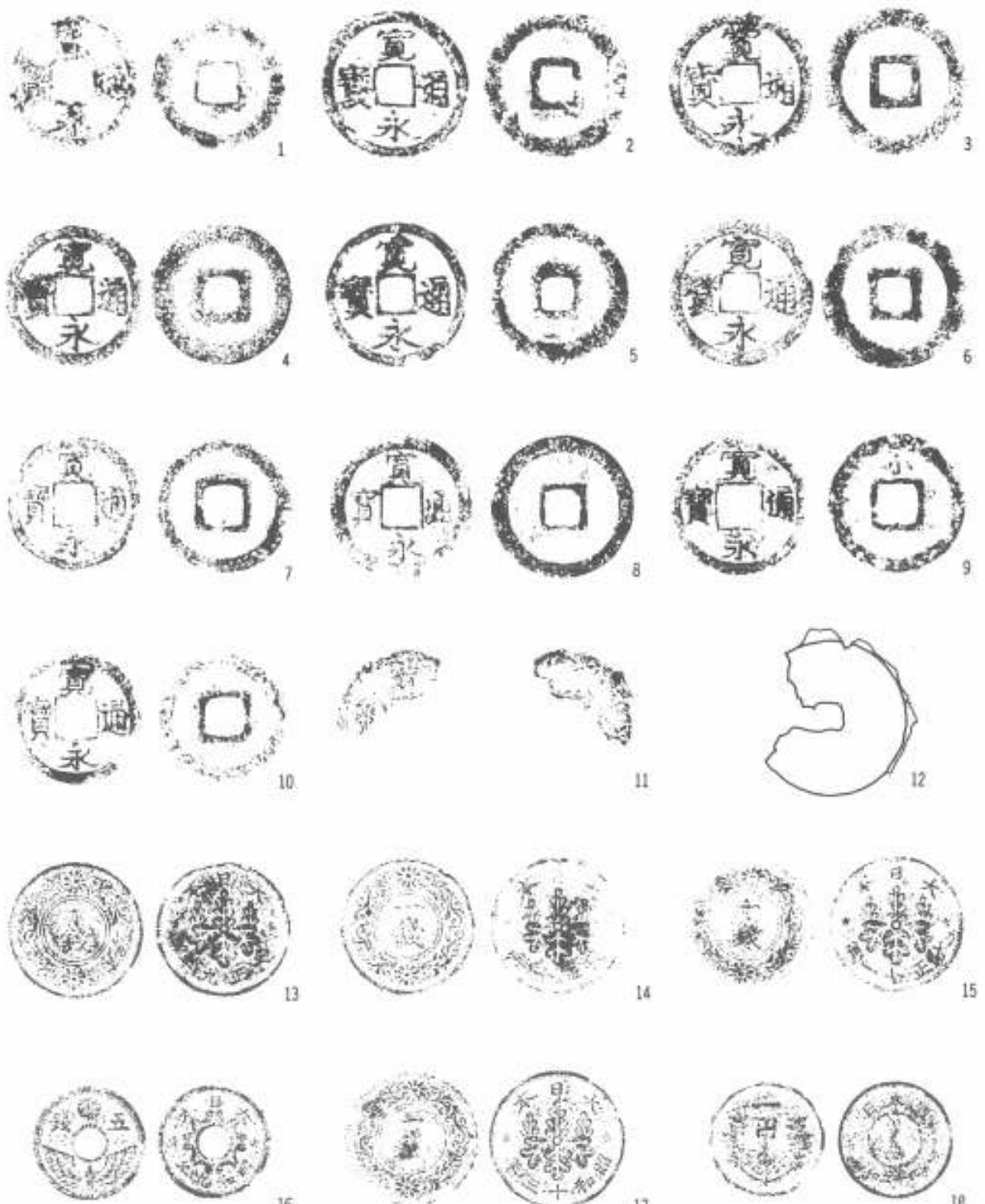
9-3-茶碗。標高42,949mから出土。口径8.4cm、高台径3.3cm、器高3.8cm。草花の文様の染付。残存率は50%である。

9-4-仏具の脚部。標高42,764mから出土。径5.1cm、残存高2.9cm。細粒砂を含み、焼成は良好で、淡褐色を呈す。脚部の70%が残存している。

9-5-煙管。標高42,288mから出土。火皿の径1.5cm、残存長4.2cm。雁首の約60%が残存しており、河骨形を呈す。

9-6-煙管。標高42,359mから出土。吸口であり、肩の直径1cm、残存長5.4cm。





0 2 cm

第1022 唐中塔上出土古錢

- 9-7-煙管。標高42.554m から出土。吸口であり、肩の直径 1.2 cm、残存長 5.8 cm。
- 9-8-砥石。標高42.27m から出土。残存長7.1cm 最大幅 3.5 cm、最大厚 2.8 cm。ひん岩。
- 10-1-古銭。寛永通宝（吉田銭）。標高42.397m から出土。直径 2.2 cm。銅銭。
- 10-2-古銭。寛永通宝（竹田銭）。1トレンチから出土。直径 2.45cm。銅銭。
- 10-3-古銭。寛永通宝（杏谷銭）。標高42.543m から出土。直径 2.45cm。銅銭。
- 10-4-古銭。寛永通宝（吉田銭）。標高43.53m から出土。直径 2.35cm。銅銭。
- 10-5-古銭。寛永通宝（吉田銭）。標高42.134m から出土。直径 2.4 cm。銅銭。
- 10-6-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。標高42.489m から出土。直径 2.4 cm。銅銭。
- 10-7-古銭。寛永通宝（猿江銭）。標高43.004m から出土。直径 2.25cm。銅銭。
- 10-8-古銭。寛永通宝（含二水永）。1トレンチから出土。直径 2.35cm。銅銭。
- 10-9-古銭。寛永通宝（狹穿背水・小梅付）。標高42.074m から出土。直径 2.3 cm。銅銭。
- 10-10-古銭。寛永通宝（日光正字）。標高42.502m から出土。直径 2.15cm。銅銭。
- 10-11-古銭。寛永通宝。標高42.047m から出土。銅銭。
- 10-12-古銭。標高 42.18 m から出土。直径 2.4 cm。銅銭。
- 10-13-古銭。桐 1 銭銅貨。標高42.171m から出土。直径 2.25cm。年号は大正 9 年。
- 10-14-古銭。桐 1 銭銅貨。1トレンチから出土。直径 2.3 cm。年号は大正 10 年。
- 10-15-古銭。桐 1 銭銅貨。標高42.171m から出土。直径 2.3 cm。年号は大正 11 年。
- 10-16-古銭。5 銭ニッケル貨。直径 1.9 cm。年号は昭和 9 年。
- 10-17-古銭。桐 1 銭銅貨。標高41.896m から出土。直径 2.3 cm。年号は昭和 13 年。
- 10-18-古銭。1 円黄銅貨。直径 1.95cm。年号は昭和 24 年。
- 集石遺構（第 8・9 図、図版 17）
- 位 置 本遺構は、庚申塚の頂上に位置し、中央より少し西側に庚申塔が建てられ、東側は、台形に近い形で川原石が集中し、西側は、東側より疎らに川原石が置かれていた。
- 規 模 北辺約 1.6 m、東辺約 0.9 m、南辺約 2.1 m、西辺約 1.4 m²。
- 遺 物 石臼が中央に置かれていた。
- 9-9-石臼。直径 35.7 cm、最大厚 6.3 cm。安山岩。下白で、目は 6 分画で、断面形は丸溝であり、臼面が摩滅している。
- 土製人形集中遺構（第 11・12 図、図版 8）
- 位 置 本遺構は、庚申塚の西側の裾部に検出され。
- 概 要 土製人形の破片が 43 点出土した。人形の頭部が 5 点検出されているので、少なくとも 5 体以上の人形がこの場所で供養等に使用されたと考えられる。
- 規 模 東西南北方向約 0.67 m、南北方向 0.35 m。
- 遺 物
- 12-1-人形。頭部は幅 3.1 cm、高さ 3.1 cm、体部は胴部幅 2.7 cm、胴部厚 2.6 cm、残存高 9.7 cm。素焼きの女性の人形であり、前面と後面をはり合わせたものである。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈す。
- 12-2-人形。頭部のみ残存し、残存幅 2.7 cm、厚さ 2.3 cm、高さ 2.3 cm。素焼きの女性の人形である。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈す。
- 12-3-人形。頭部のみ残存し、残存幅 2.7 cm、残存高 2.4 cm。素焼きの女性の人形であり、前面と後面をはり合わせたものである。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色・黒色を呈す。
- 12-4-人形。頭部のみ残存し、残存幅 1.8 cm、残



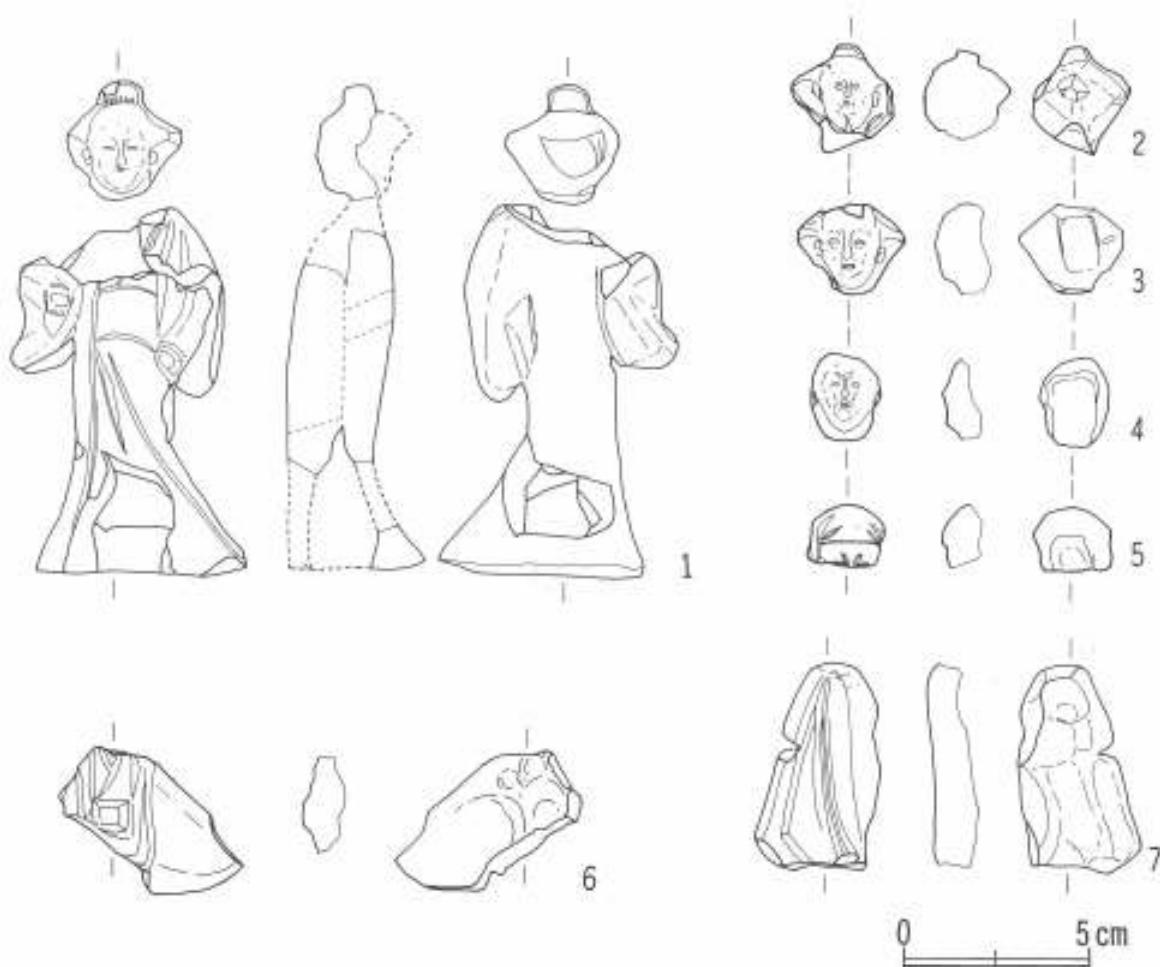
第11図 庚申塚土製人形出土状態

存高 2.2 cm。素焼きの女性と考えられる人形で、前面と後面をはり合わせたものである。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈す。

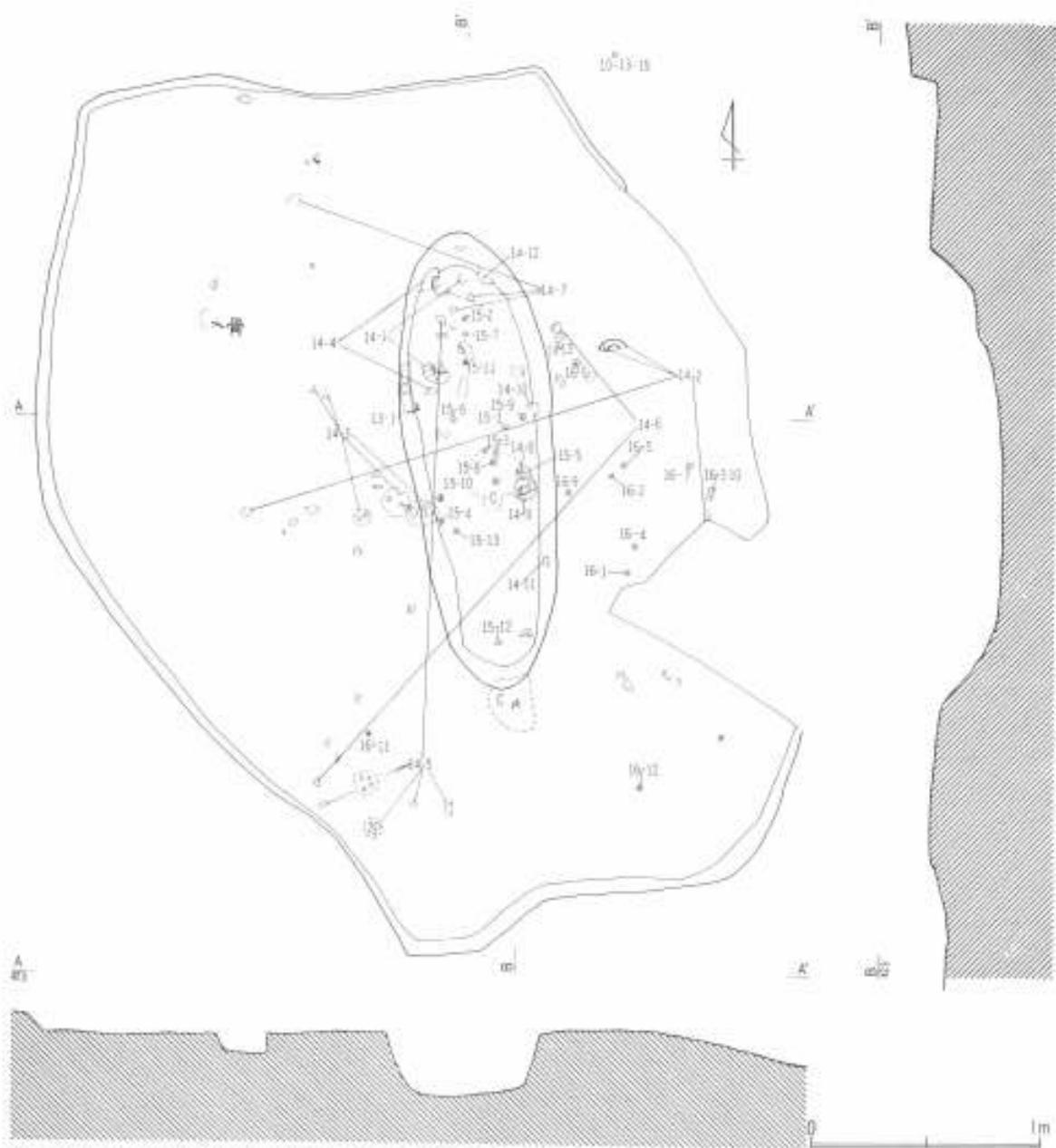
12-5-人形。頭部のみ残存し、残存幅 1.9 cm、残存高 1.7 cm。素焼きの人形で、女性と考えられ、前面と後面をはり合わせたものである。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈す。

12-6-人形。体部の上半のみ残存し、残存高 3.7 cm。素焼きの女性の人形で、前面と後面をはり合わせたものである。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は褐色である。

12-7-人形。着物の裾の部分であり、残存高 5.5



第12図 庚申塚出土土製人形



第13図 庚申塚埋葬施設

cm。素焼きの女性の人形で、前面と後面をはり合わせたものである。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は褐色である。

庚申塚埋葬施設 (第13~16図、図版7・8・19~21)

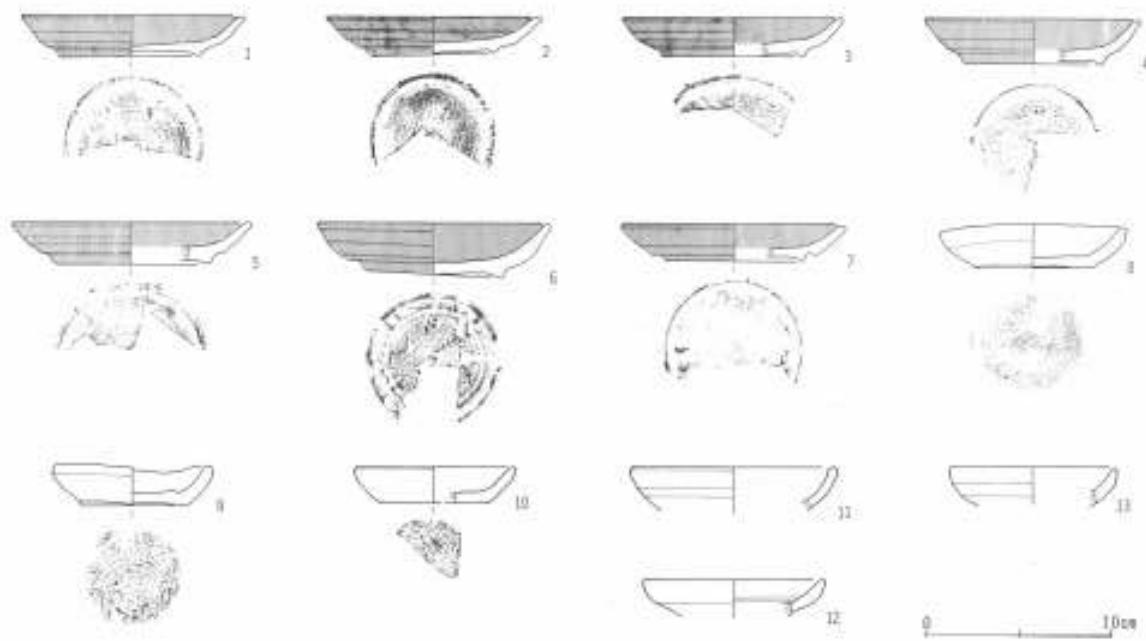
位 置 本施設は、塚の中心部に検出された火葬墓

概 要 であった。長椭円形を呈し、主軸はN-7°—Wを示す土壌とその周囲の火を受けた焼

いる部分からなる。このことは、この場所で焼かれて、そのまま火葬墓にしたことが考えられる。

規 模 土壌: 長さ2.01m、最大幅0.67m、深さ0.33m。焼土の範囲: 南北方向3.84m、東西方向3.17m。

遺 物 焼物57点、古銭26点、人骨が出土し、古銭は、土壌内から16枚、土壌外から10枚出土し



第14図 唐中塚埋葬施設出土遺物

た。

14-1-小皿。土壌内北側から出土。口径11.8cm、高台径7.4cm、器高2.3cm。地の色調は灰褐色を呈す。釉は長石釉であり、残存率は50%である。

14-2-小皿。土壌の北東側の破片と、西側の破片が接合した。口径11.4cm、高台径6.5cm、器高2cm。地の色調は、灰褐色を呈す。釉は長石釉であり、残存率は70%である。

14-3-小皿。土壌の西側から出土した。口径11.7cm、高台径7.5cm、器高2.1cm。地の色調は淡黄色を呈す。釉は長石釉であり、残存率は35%である。

14-4-小皿。土壌内北西部から出土した。口径11.6cm、高台径7.3cm、器高2.5cm。地の色調は淡黄色を呈す。釉は長石釉であり、残存率は40%である。

14-5-小皿。土壌内北側の破片と土壌外南西側の破片が接合した。口径12.6cm、高台径8.3cm、器高2.2cm。地の色調は、淡黄色である。釉は長石釉であり、残存率は55%である。

14-6-小皿。土壌の北東側の破片と南西側の破片

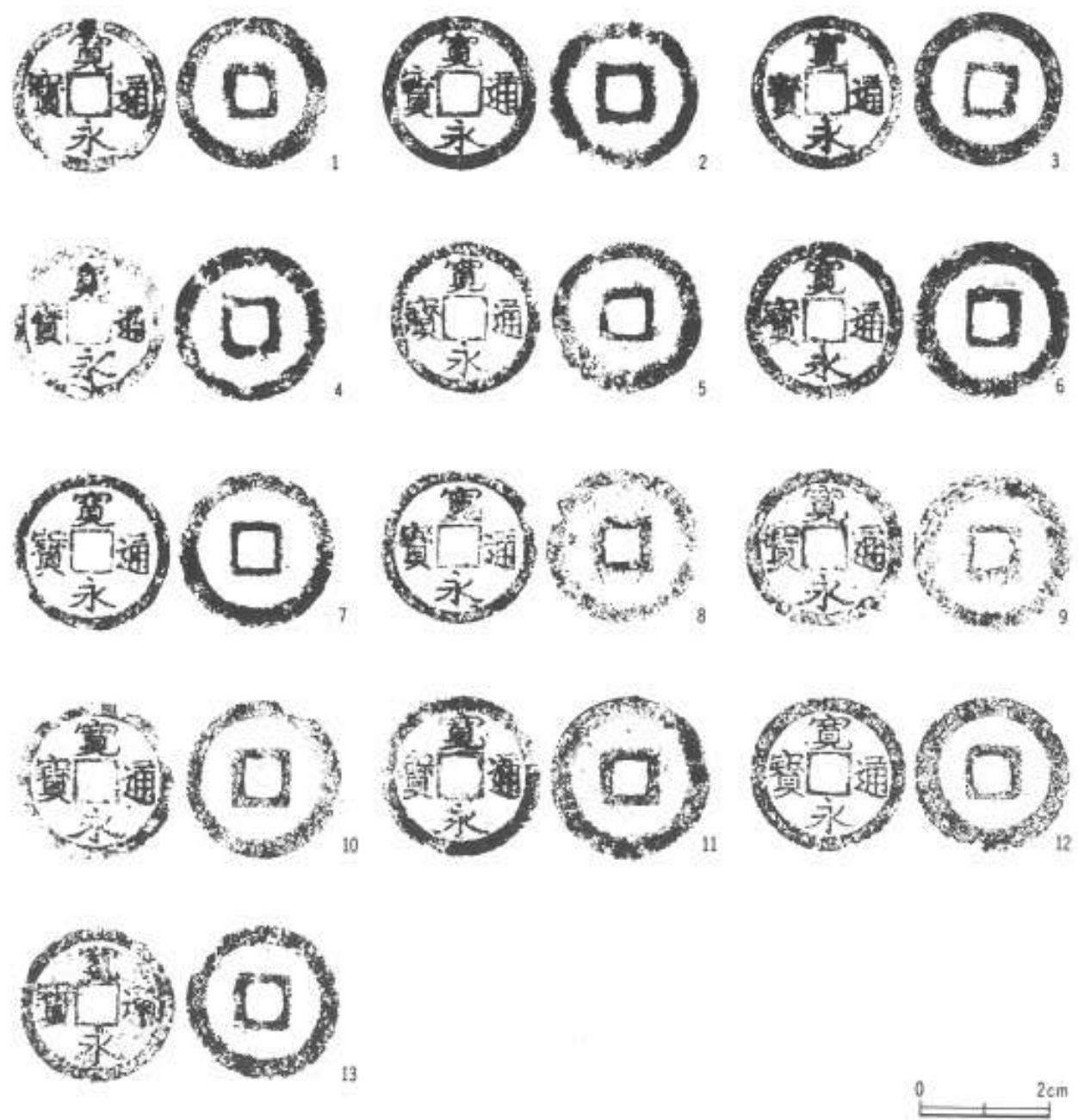
が接合した。口径12.4cm、高台径7.2cm、器高2.8cm。地の色調は淡黄色を呈す。釉は長石釉であり、残存率は60%である。

14-7-小皿（志野縫部）。土壌内北側の破片と土壌外北西部の破片が接合した。口径12cm、高台径7.3cm、器高2cm。地の色調は、淡黄色を呈す。残存率は55%である。

14-8-かわらけ。土壌内中央部の東側から出土した。長径10cm、短径9.7cm、底径6.1cm、器高2.4cm。中粒砂を多く含み、粗粒砂を少し含む。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈す。ほぼ完形であり、口縁の一部に煤が付着している。片口の土器である。

14-9-かわらけ。土壌内中央部の東側で、14-8の南から出土した。長径9.1cm、短径8.4cm、底径5.5cm、器高2.2cm。中粒砂を多く含み、焼成は良好で、色調は淡褐色を呈す。ほぼ完形で、口縁の一部に煤が付着している。片口の土器である。

14-10-かわらけ。土壌内中央部の東側で、14-8の北から出土した。口径8.5cm、底径5.8cm、器高1.9cm。中粒砂を多く含み、焼成は良好



第15図 庚申塚埋葬施設出土古銭(1)

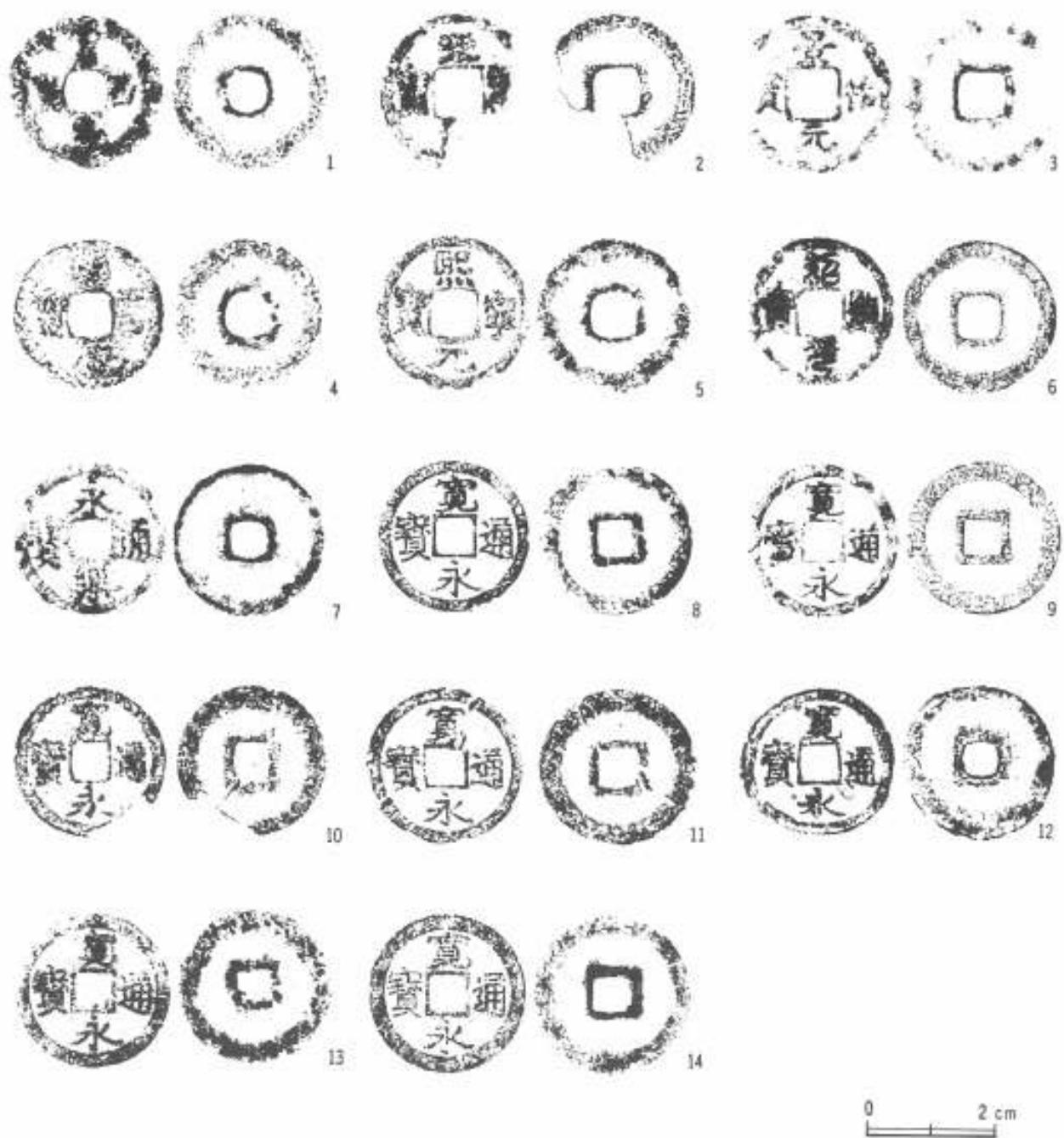
で、色調は淡褐色である。残存率は20%である。

14-11-かわらけ。土壇内南東側から出土した。口径11cm、残存高2.3cm。中粒砂を含み、焼成は良好で、色調は褐色を呈す。残存率は15%である。

14-12-かわらけ。土壇内の北側から出土した。口

径9.6cm、残存高2cm。中粒砂を多く含み、焼成は良好であり、色調は褐色で黒斑を有する。残存率は30%である。

14-13-かわらけ。土壇の北東側から出土した。口径9cm、残存高2.1cm。中粒砂を多く含み、焼成は良好で、色調は褐色である。残存率は20%である。



第16図 広中塚埋葬施設出土古銭 (2)

15- 1 -古銭。寛永通宝（吉田銭）。土壙中央の東側から出土。直径 2.4 cm。銅銭。

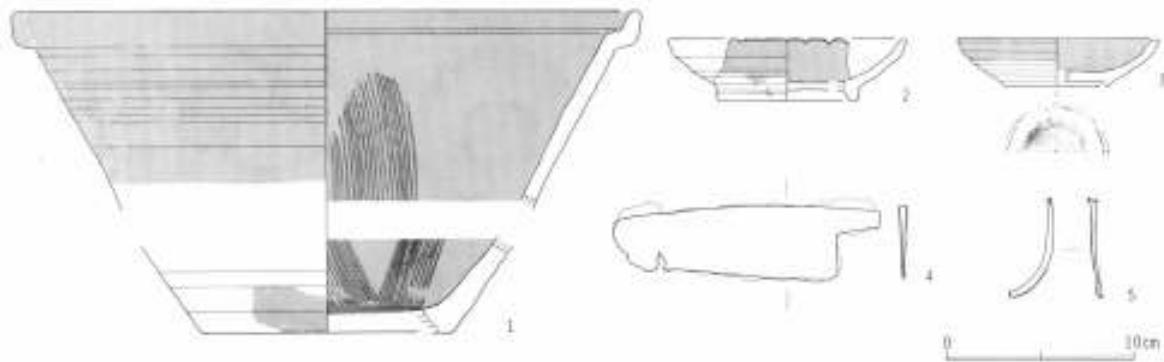
15- 2 -古銭。寛永通宝（吉田銭）。土壙内の北側から出土。直径 2.35 cm。銅銭。

15- 3 -古銭。寛永通宝（松本銭）。土壙の中央から出土。直径 2.35 cm。銅銭。

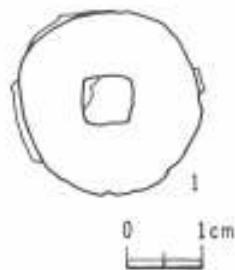
15- 4 -古銭。寛永通宝（松本銭）。土壙中央の西側から出土。直径 2.35 cm。銅銭。

15- 5 -古銭。寛永通宝（高田銭）。土壙中央の東側から出土。直径 2.35 cm。銅銭。

15- 6 -古銭。寛永通宝（竹田銭）。土壙中央の西側から出土。直径 2.4 cm。銅銭。



第17図 馬埋葬遺構出土遺物



第18図 馬埋葬遺構出土古銭 15-9-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。土壤中央の東側から出土。直径2.45cm。銅銭。

15-10-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。土壤中央の西側から出土。直径2.45cm。銅銭。

15-11-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。土壤内の北側から出土。直径2.5cm。銅銭。

15-12-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。土壤内の南側から出土。直径2.4cm。銅銭。

15-13-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。土壤内の西側から出土。直径2.4cm。銅銭。

16-1-古銭。祥符元宝。土壤の東側から出土。直径2.45cm。銅銭。

16-2-古銭。天聖元宝（篆書体）。土壤の東側から出土。直径2.5cm。銅銭。

16-3-古銭。景祐元宝（真書体）。土壤の東側から出土。直径2.5cm。銅銭。

16-4-古銭。治平元宝（篆書体）。土壤の東側から出土。直径2.3cm。銅銭。

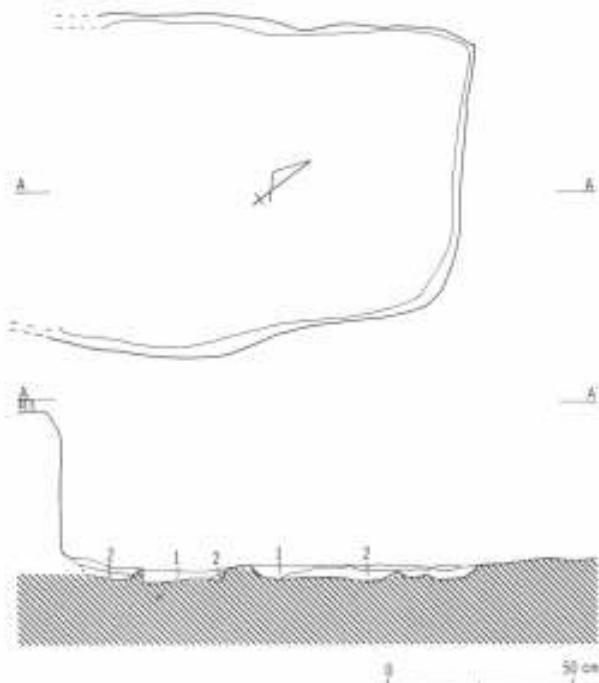
- 15-7-古銭。寛永通宝（竹田銭）。土壤内の北側から出土。直径2.45cm。銅銭。
15-8-古銭。寛永通宝（竹田銭）。土壤の中央から出土。直径2.4cm。銅銭。

- 16-5-古銭。熙寧元宝（真書体）。土壤の東側から出土。直径2.4cm。銅銭。
16-6-古銭。紹聖元宝（篆書体）。直径2.4cm。銅銭。
16-7-古銭。永樂通宝。直径2.4cm。銅銭。
16-8-古銭。寛永通宝（吉田銭）。土壤の東側から出土。直径2.4cm。銅銭。
16-9-古銭。寛永通宝（松本銭）。土壤の東側から出土。直径2.4cm。銅銭。
16-10-古銭。寛永通宝（萩銭）。土壤の東側から出土。直径2.4cm。銅銭。
16-11-古銭。寛永通宝（竹田銭）。土壤の南西から出土。直径2.45cm。銅銭。
16-12-古銭。寛永通宝（竹田銭）。土壤の南東から出土。直径2.4cm。銅銭。
16-13-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。直径2.4cm。銅銭。
16-14-古銭。寛永通宝（鳥越銭）。直径2.45cm。銅銭。

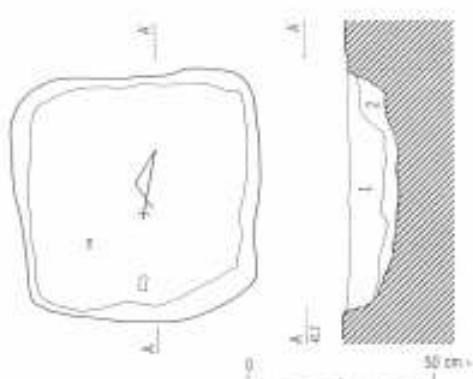
馬埋葬遺構(第17~19図、図版7・9~11・19~22)
位 置 本遺構は、庚申塚の南約1.5mの所に位置
概 要 し、不整長楕円形を呈し、東西方向に細長く
検出された。地山の疊層を掘込んであり、土
層は1層が褐色土（火山灰を含む）、2層が
褐色土（火山灰を多く含む）、3層が灰褐色
土（火山灰を多く含む）、4層が焼土（火山



第19图 马埋葬遗物



第20図 1号土塚



第21図 2号土塚

底を多く含む)、5層が褐色土(火山灰を非常に多く含む)、6層が褐色土(砂質で、火山灰を多く含む)、7層が褐色土(火山灰を多く含む)、8層が褐色土(火山灰を非常に多く含む)、9層が褐色土(火山灰を含む)

10層が褐色土(炭化物を含む)、11層が暗褐色土(火山灰を含む)、12層が明褐色土、13層が褐色土(さらさらしており、火山灰を含む)である。

規 模 長軸 8.6 m、短軸 3.1 m、深さ 0.81 m

遺 物 上層から焼物18点、鉄製品10点、銅製品2点、古銭3点が出土し、下層から大量の馬歯・馬骨が検出された。

17-1-捕鉢(美濃)。本遺構の南東側から出土。口径33.4cm、底径15.1cm。中粒砂を含み、焼成は良好で、地の色調は淡黄色である。釉は鉄釉。残存率20%。

17-2-菊皿(美濃)。標高41,887mから出土。口径12.6cm、高台径7.5cm、器高3.3cm。中粒砂を含み、焼成は良好で、地の色調は淡黄色である。釉は灰釉。残存率20%。

17-3-小皿。標高41,992mから出土。口径10.7cm、高台径5.6cm、器高2.5cm。細粒砂を含み、焼成は良好で、地の色調は淡黄色である。釉は灰釉。残存率40%。

17-4-庖丁。標高42,055mから出土。残存長14.3cm、幅3.8cm。鉄製品。

17-5-銅製品。標高41,86mから出土。図の上部は二又になっており、下部はひねられている。

18-1-古銭。標高42,01mから出土。直径2.4cm。鉄銭。この他に寛永通宝が2枚(19-120,121)が出土。馬歯・馬骨については、冒頭に記す。

1号土塚(第20図)

位 置 本土塚は、調査区の南西に位置し、土塚の

概 要 南西部は調査区外であった。平面形は長方形を呈すと考えられ、底面は凹凸であった。土層は1層が黒褐色土(骨片と炭を含む)、2層が褐色土であった。

規 模 短軸92cm、深さ4cm。

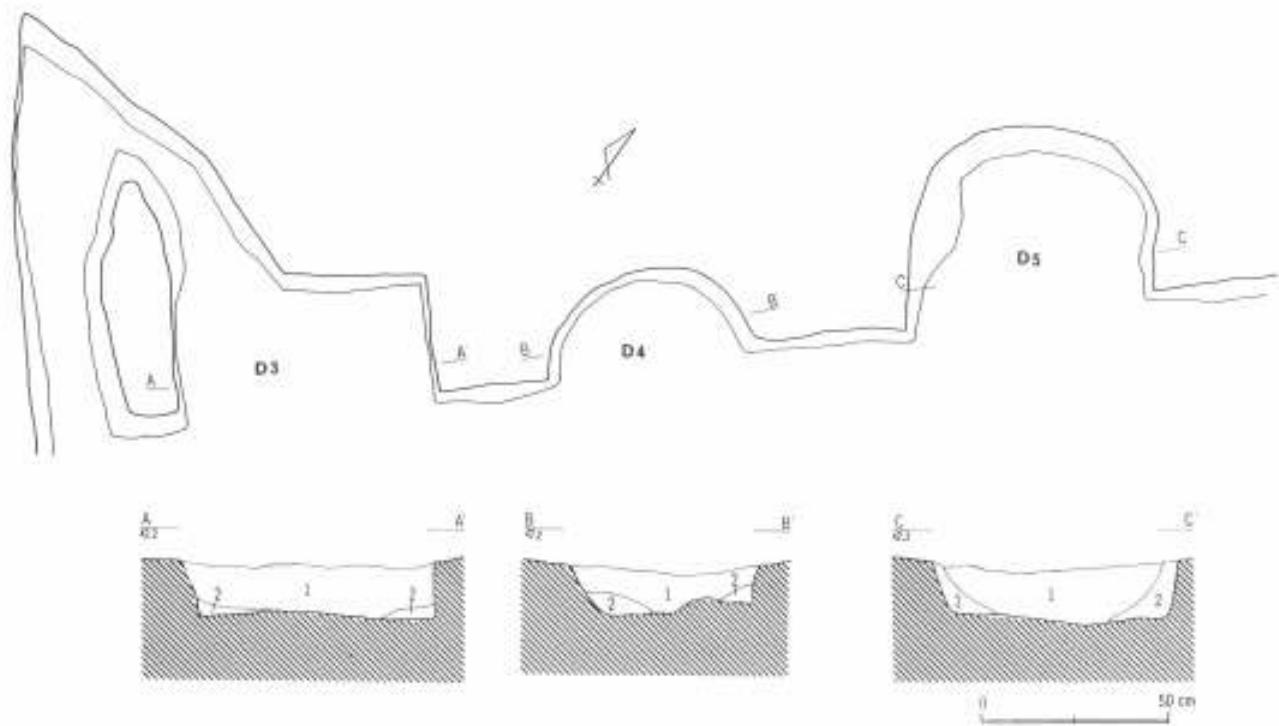
遺 物 骨片、炭化物。

2号土塚(第21図)

位 置 本土塚は、1号土塚の南東3mの所に位置

概 要 する。平面形は方形で、土層は1層が黒褐色土、2層が褐色であった。

規 模 南北65cm、東西65cm、深さ13cm。



第22図 3 + 4 + 5号土塚

遺物なし。

3号土塚(第22図)

位 置 本土塚は、2号土塚の南東概 要に位置し、南側はトレンチにより削平された。土層は1層が褐色土、2層が砂質の褐色土であった。

規 模 断面A-A'の長さ67cm、深さ12cm。

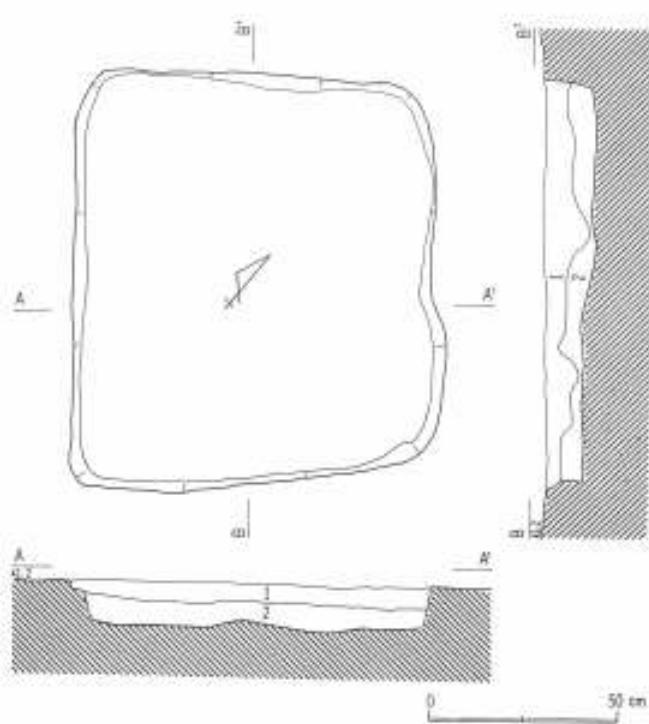
遺 物 なし。

4号土塚(第23図)

位 置 本土塚は、3号土塚の北東概 要に接し、南側はトレンチにより削平された。土層は、3号土塚と同じであった。

規 模 断面B-B'の長さ50cm、深さ12cm。

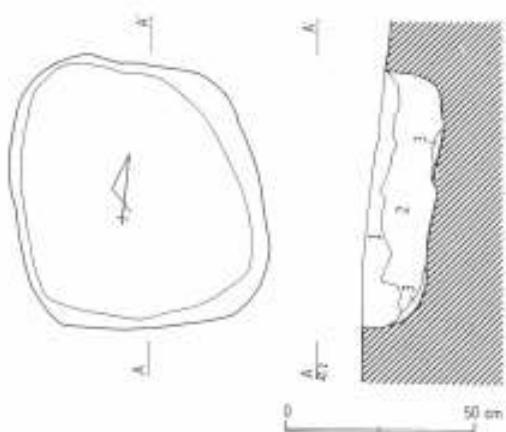
遺 物 なし。



第23図 6号土塚

5号土塙(第22図)

位 置 本土塙は、4号土塙の北東に接し、南側は概要 トレンチにより削平された。土層は、3号土塙と同様であった。



第22図 5号土塙

規 模 断面C—C'の長さ65cm、深さ15cm、

遺 物 なし。

6号土塙(第23図)

位 置 本土塙は、5号土塙の北東6.3mに位置し、概要 長方形を呈す。土層は、3号土塙と同じであった。

規 模 断面A—A'の長さ92cm、深さ14cm、遺 物 なし。

7号土塙(第24図)

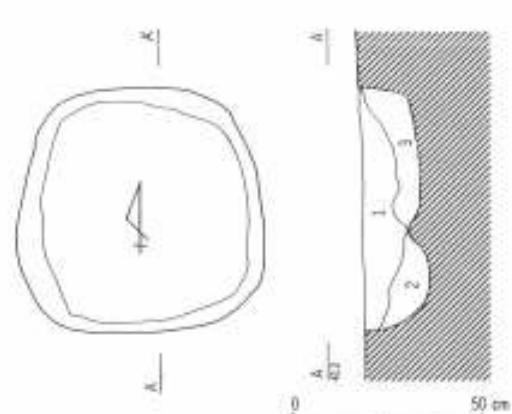
位 置 本土塙は、6号土塙の南方5.5mの所に位置し、概要 方形を呈す。土層は、1層が暗褐色土、2層が褐色土、3層が褐色土、4層が砂質の褐色土であった。

規 模 断面A—A'の長さ68cm、深さ17cm、遺 物 なし。

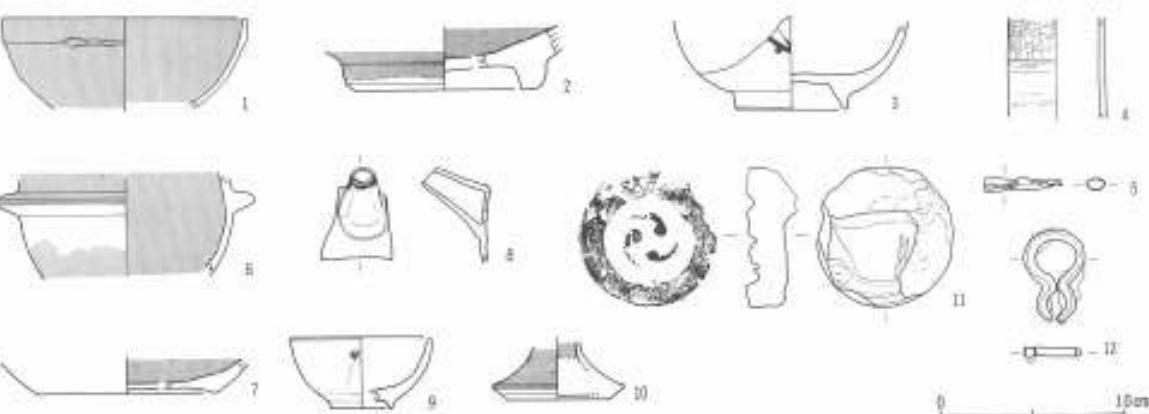
8号土塙(第25図)

位 置 本土塙は7号土塙の北東に位置し、方形を概要 呈していた。土層は1層が火山灰を含む暗褐色土、2層が褐色土、3層が火山灰を含む褐色土であった。

規 模 断面A—A'の長さ65cm、深さ17cm、遺 物 なし。



第24図 7号土塙



第25図 8号土塙

グリッド・一括出土遺物（第26図、図版22）

- 26-1-塊。G 4 グリッド出土。口径13cm、残存高4.9cm。中粒砂を含み、地は灰褐色。釉は灰釉。残存率20%。
- 26-2-片口鉢（唐津）。E 6 グリッド出土。高台径9.6cm、残存高3.4cm。粗粒砂を含み、地は灰褐色。釉は灰釉。残存率は底部の20%。
- 26-3-鉢。F 6 グリッド出土。高台径6cm、残存高4.9cm。残存率25%。染付。
- 26-4-徳利。F 6 グリッド出土。下部の直径5.3cm、残存高5.4cm。
- 26-5-煙管。G 5 グリッド出土。吸口であり、左端の径は1×0.8cm、残存長4.3cm。銅製。
- 26-6-土鍋。鋤部径15.7cm、残存高5.5cm。外面の鋤より下の部分に煤が付着している。地は淡黄色で、残存率は10%。

26-7-片口鉢。底径9.4cm、残存高1.8cm。外面に煤が付着している。細粒砂を含み、色調は褐色である。残存率は底部の20%。

26-8-急須。注口の部分である。注口部の口径は1.1cmである。染付。

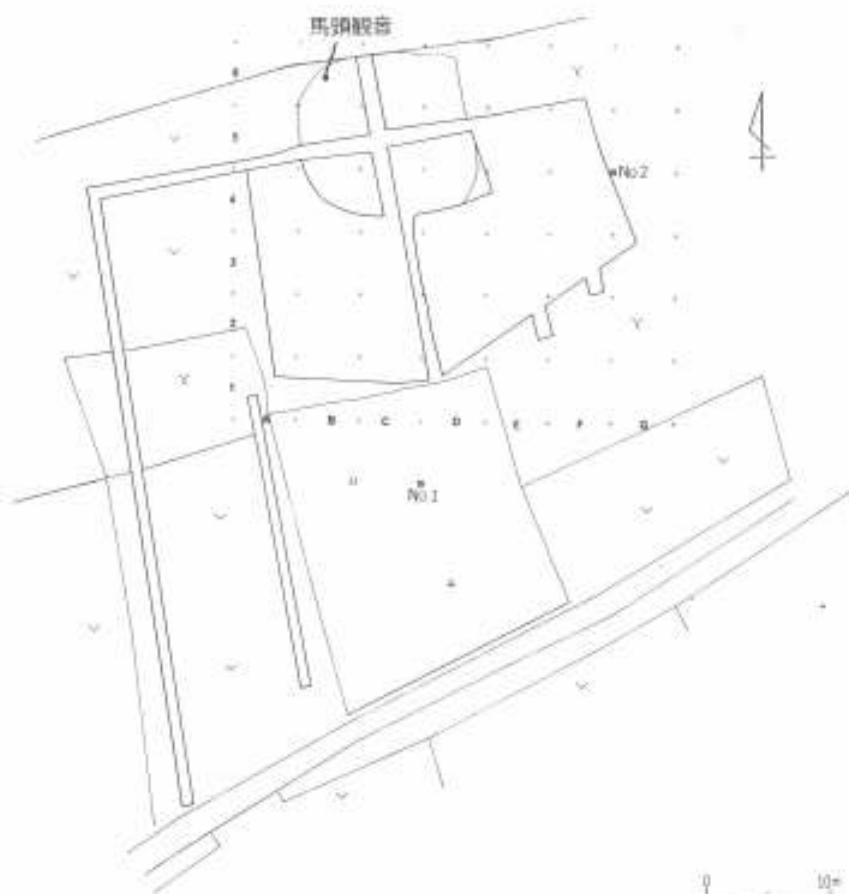
26-9-茶碗。口径7.6cm、高台径3.3cm、器高3.8cm。残存率は25%。染付。

26-10-灯明台。底径5.5cm、残存高3.1cm。

26-11-巴文軒丸瓦。直徑7.5cm。

26-12-鉄器。馬具と考えられ、全長5cm、太さ5mm。

V. 松原遺跡



第27図 松原遺跡位置図

1. 遺跡の概観

松原遺跡は、庚申塚遺跡の南西約350mに位置し、標高43m前後の自然堤防上に立地している。

今回の調査によって、土葬墓9基、火葬墓3基が検出された。

土葬墓は、土壙内及び土壙上面にも川原石が置かれているもの、土壙上面だけに川原石が置かれているもの、川原石が置かれていないものの3タイプがあった。

火葬墓は、炭化物と骨があまり多く出土せず、掘込みの浅いもの、焼土・骨・炭化物が多く出土し、川原石・古銭等が上面にあるものの2タイプがあった。

2. 遺構と遺物

1号土葬墓(第28図・図版14)

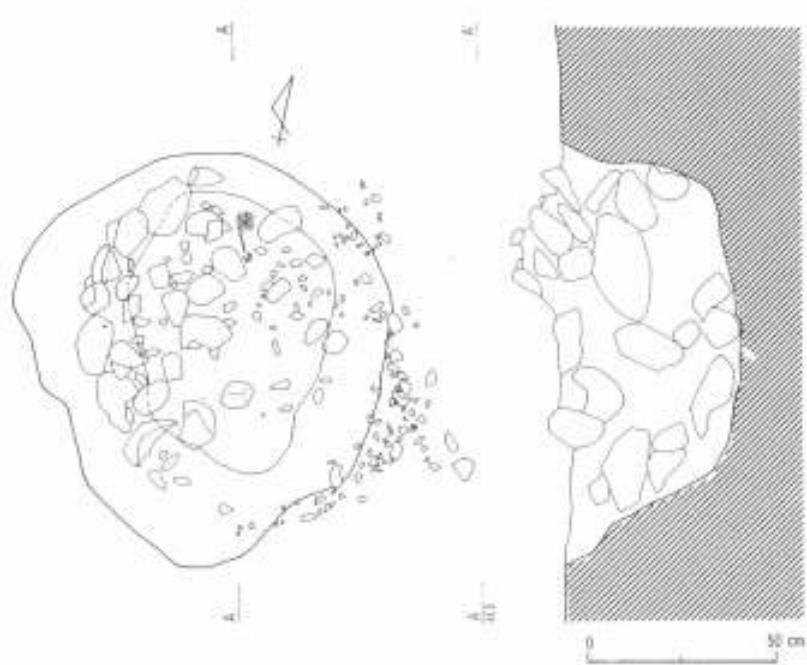
位 置 本土葬墓は、調査

概 要 区の中央に検出され、

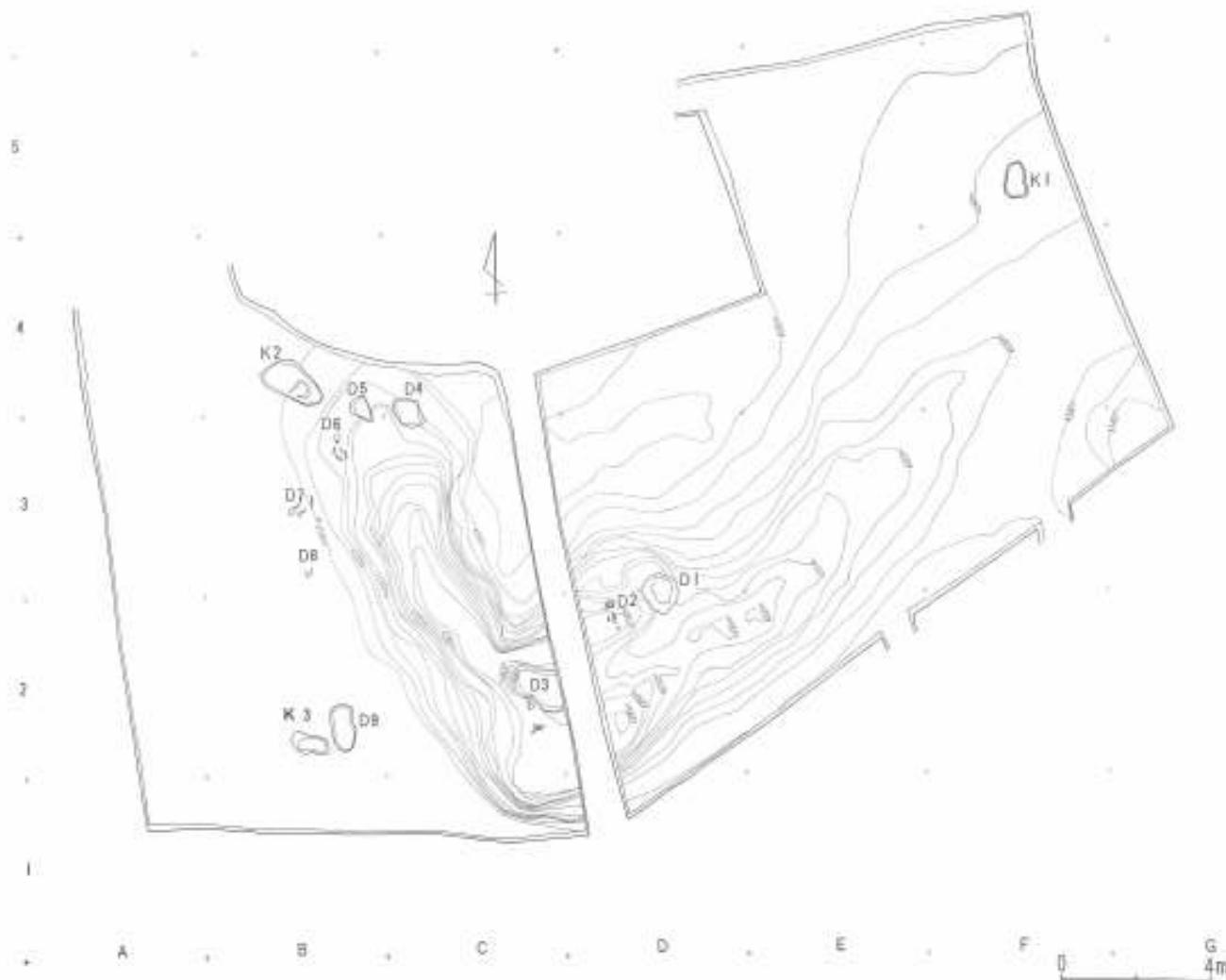
川原石が、土壤内及
び土壤上面にも置か
れていた。

平面形は不整円形
であり、掘込みは深
く、しっかりしてい
た。

土層は、褐色土が
堆積していた。

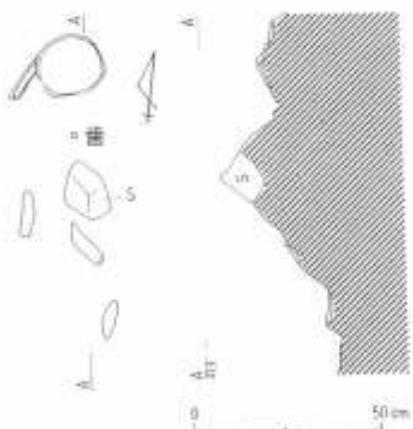


第28図 1号土葬墓

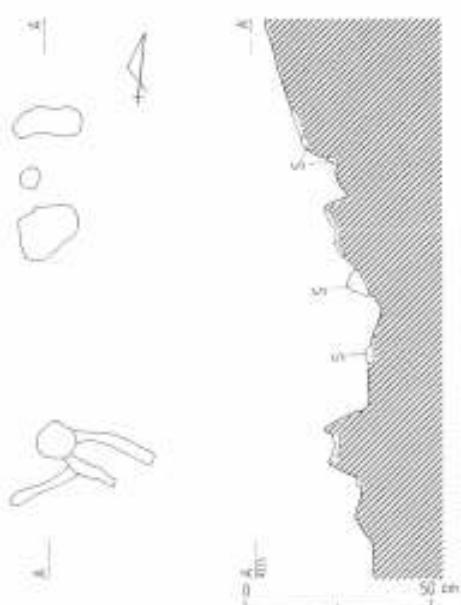


第29図 松原遺跡全測図

遺物 人骨・歯が出土した。



第30図 2号土葬墓



第31図 3号土葬墓

規模 断面A-A'の長さ1.12m、深さ0.46m。

遺物 底面上に人間の歯が5点検出された。

2号土葬墓 (第30図、図版14)

位置 本土葬墓は、1号土葬墓の西側に位置し、

概要 土壌の掘込みが確認できず、人骨のみ検出さ
れた。

頭位は北を向き、足は、レベルが異なって
検出された。

規模 頭骨の大きさ18×16cm

3号土葬墓 (第31図、図版14)

位置 本土葬墓は、2号土葬墓の南西に位置し、

概要 土壌の掘込みが確認できず、人骨のみ検出さ
れた。

頭位は北を向き、足は曲げられて検出され
た。

規模 人骨の南北方向の長さ1.07m。

遺物 人骨。

4号土葬墓 (第32・33・38図、図版14)

位置 本土葬墓は、調査区の西側に位置し、3号

概要 土葬墓の北西8mの所に検出された。

平面形は、菱形を呈し、掘込みのしっかり
したものである。

土壌の上面には、多量の川原石がおかれ、
第1確認面より、第2確認面の方が大きい川
原石を使用して、置かれてあった。

土層は、褐色土が堆積していた。

規模 断面A-A'の長さ71cm、断面B-B'の長さ
94cm、深さ45cm。

遺物 土壌の北側に板碑片(38-7)が置かれ、
南側には陶器の小皿(38-1)があり、それ
らの中間に古銭(38-1~3)が検出された。

人骨は、大腿骨と胫骨が出土した。

38-1 古銭。永楽通宝。標高42,939mから出土。

直径2.5cm。銅銭。

38-2 古銭。永楽通宝。標高42,805mから出土。

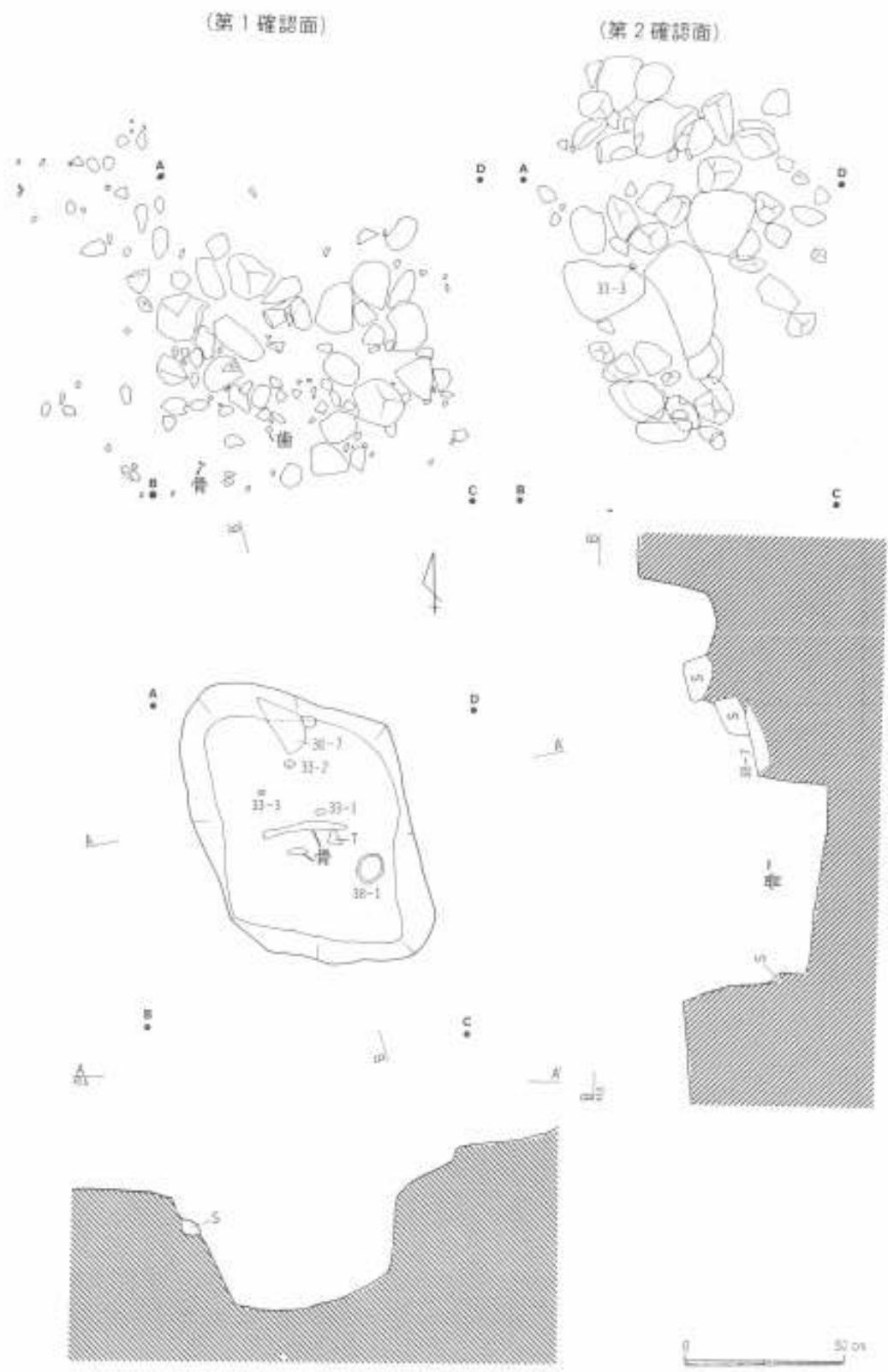
直径2.4cm。銅銭。

38-3 古銭。永楽通宝。標高43,118mから出土。

直径2.4cm。銅銭。

38-1 小皿。標高42,903mから出土。口径11.2cm、
高台径7cm、器高2.1cm。地の色調は淡黄褐
色で、釉は長石釉である。完形品である。

38-7 板碑。標高42,978mから出土。残存長27.4
cm、残存幅12.8cm。緑泥片岩。



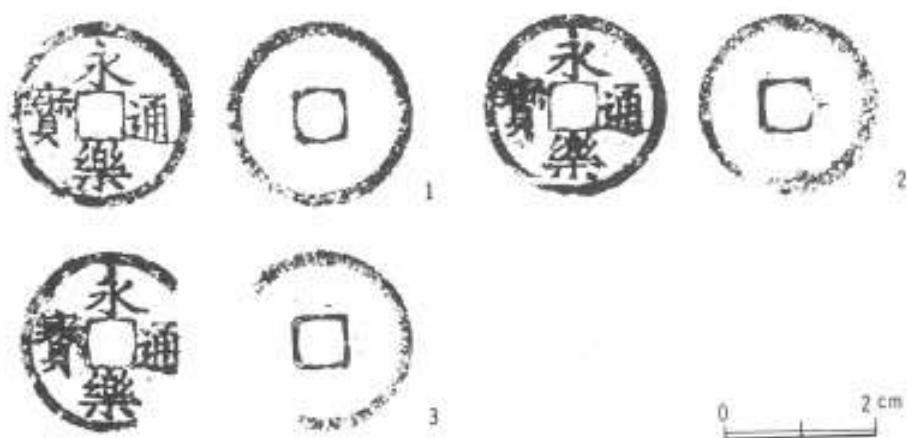
第32図 4号土葬墓

5号土葬墓（第34・35・38、図版15・22～24）
位 置 本土葬墓は、4号土葬墓の西側に検出され、規 模
概 要 平面形は、不整形な三角形を呈していた。 土 壤 上 面 の 南 側 に は、川原石が置かれていた。

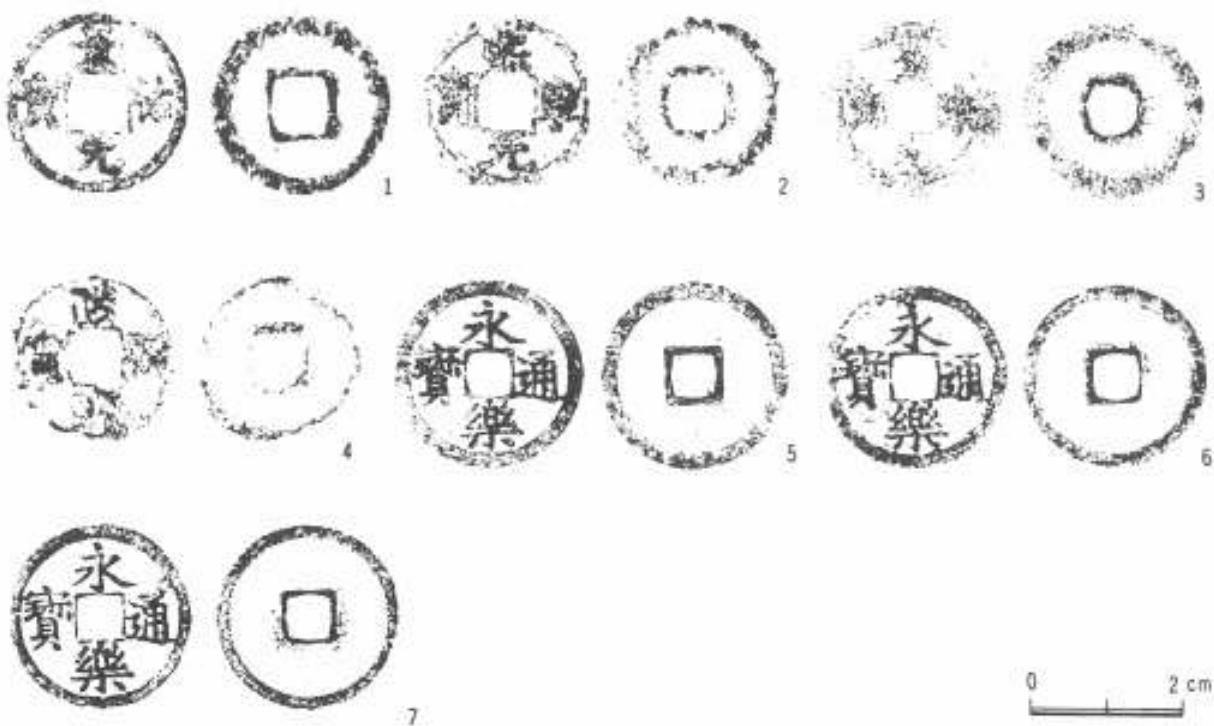
土層は、1層が褐色土（礫を含む）、2層
が褐色土（骨と炭を多く含む）、3層が褐色
土、4層が褐色土（骨と炭を少し含む）、5

層が暗褐色土であった。
長軸1.6m、短軸0.89m、深さ0.52m。
遺 物 土壌の北側から、かわらけ・陶器小皿が出
土し、南側からは、古銭が出土した。
人骨は、大腿骨・胫骨が検出された。

34-1 古銭。景祐元宝（真書体）。標高43.263m
から出土。直径2.4cm。銅銭。
34-2 古銭。熙寧元宝（真書体）。標高43.149m



第33図 4号土葬墓出土古銭

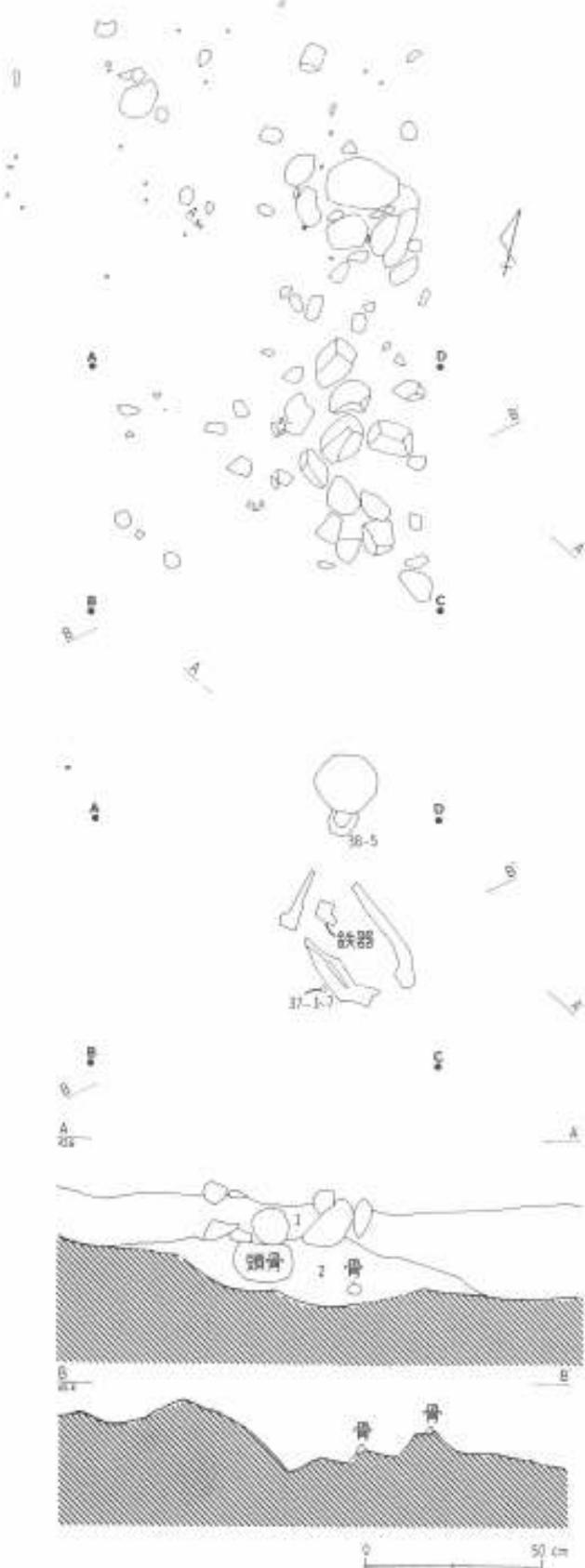


第34図 5号土葬墓出土古銭

- から出土。直径 2.3 cm。銅錢。
34-3-古錢。聖宋元寶（真書体）。標高43.262m
から出土。直径 2.4 cm。銅錢。
34-4-古錢。政和通宝（篆書体）。標高43.669m
から出土。直径 2.1 cm。銅錢。
34-5-古錢。永樂通宝。標高43.326m から出土。
直径 2.5 cm。銅錢。
34-6-古錢。永樂通宝。標高43.326m から出土。
直径 2.4 cm。銅錢。
34-7-古錢。永樂通宝。
標高43.262m から
出土。銅錢。
- (第1確認面)
-
- 38-2-かわらけ。標高
43.05m から出土。
口径 8.7 cm、底径
5.1 cm、器高 2.1
cm。中粒砂を多く
含み、焼成は良好
で、色調は淡褐色
である。底部は左
回転糸切り離しで、
残存率は95%であ
る。
- 38-3-かわらけ。標高
42.98m から出土。
口径 9 cm、底径 5.7
cm、器高 2.2 cm。
中粒砂を多く含み、
焼成は良好で、色
調は淡褐色である。
底部は左回転糸切
り離しで、完形品
である。
- 38-4-小皿。標高43.065
m から出土。口径
11.8cm、高台径7.6
cm、器高 2.5 cm。
中粒砂を含み、地
の色調は淡黄色で
ある。釉は長石釉
で、残存率は95%
である。

第35図 5号土葬墓

(第1確認面)



第36図 6号土葬墓

6号土葬墓 (第36~38図、図版16・23・24)

位置 本土葬墓は、5号土葬墓の南側に位置しており、土壤の掘込みが確認できず、人骨のみ検出された。

頭位は北、顔は東を向いており、かわらけ(38-5)が、頭骨の下から出土した。股関節及びひざ関節を強く曲げる屈葬姿勢であった。

土層は、1層が褐色土で、2層が暗褐色土であった。

規模 人骨の南北方向の長さ72cm。頭骨は径18×16cm。

遺物 かわらけ1点、古銭7枚、鉄製品1点が出土した。

37-1-古銭。天聖元宝(篆書体)。標高43.158mから出土した。直径2.4cm。
銅銭。

37-2-古銭。至和元宝(篆書体)。標高43.158mから出土した。直径2.3cm。
銅銭。

37-3-古銭。元豐通宝(真書体)。標高43.158mから出土した。直径2.35cm。
銅銭。

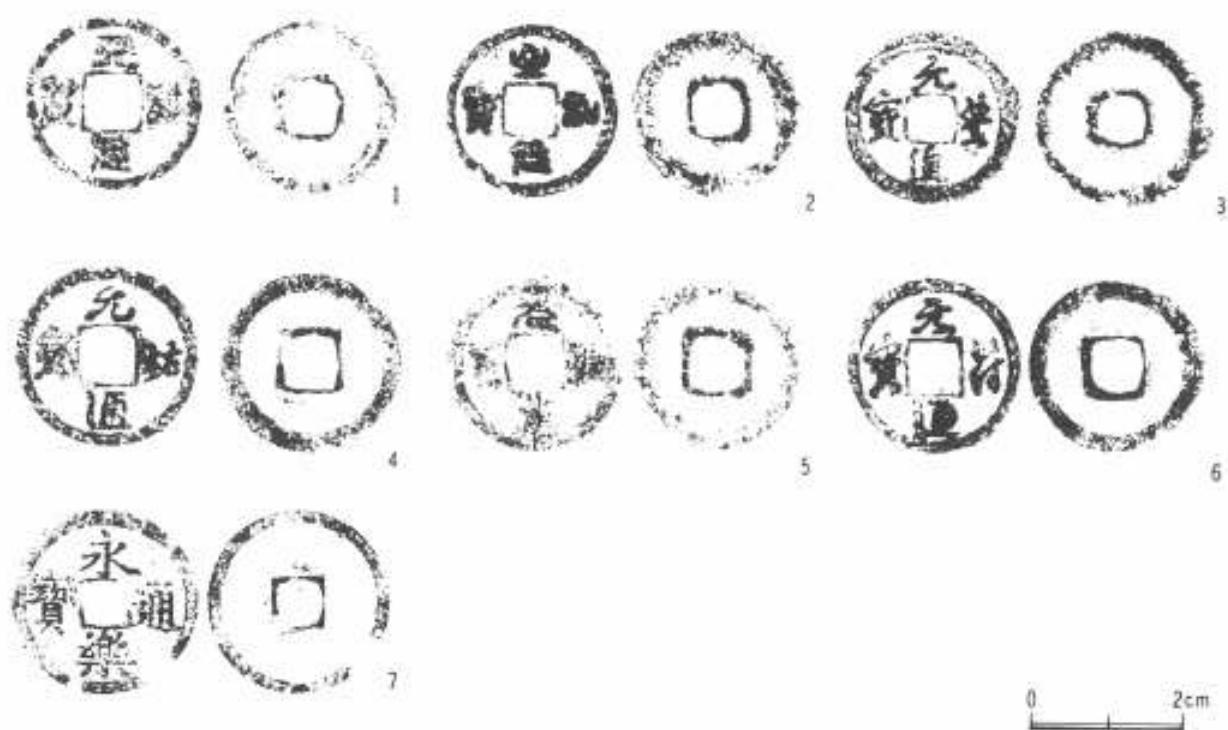
37-4-古銭。元祐通宝(真書体)。標高43.158mから出土した。直径2.4cm。
銅銭。

37-5-古銭。元祐通宝(篆書体)。標高43.158mから出土した。直径2.35cm。
銅銭。

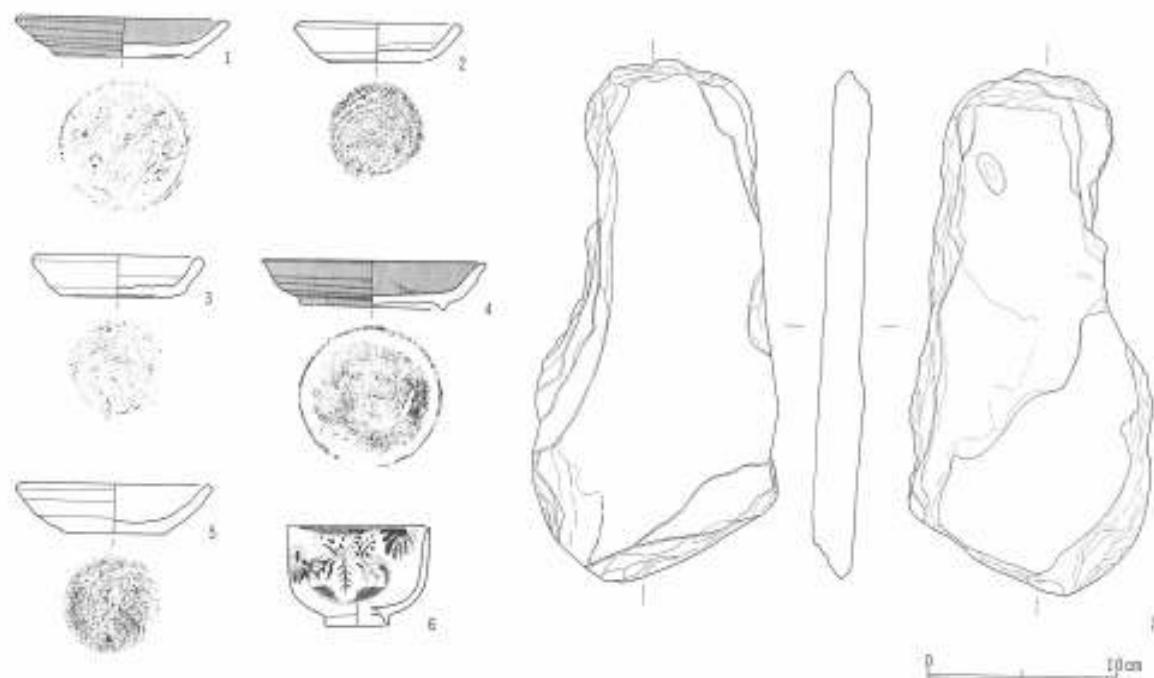
37-6-古銭。元符通宝(真書体)。標高43.158mから出土した。直径2.3cm。
銅銭。

37-7-古銭。永樂通宝。標高43.158mから出土した。直径2.45cm。銅銭。

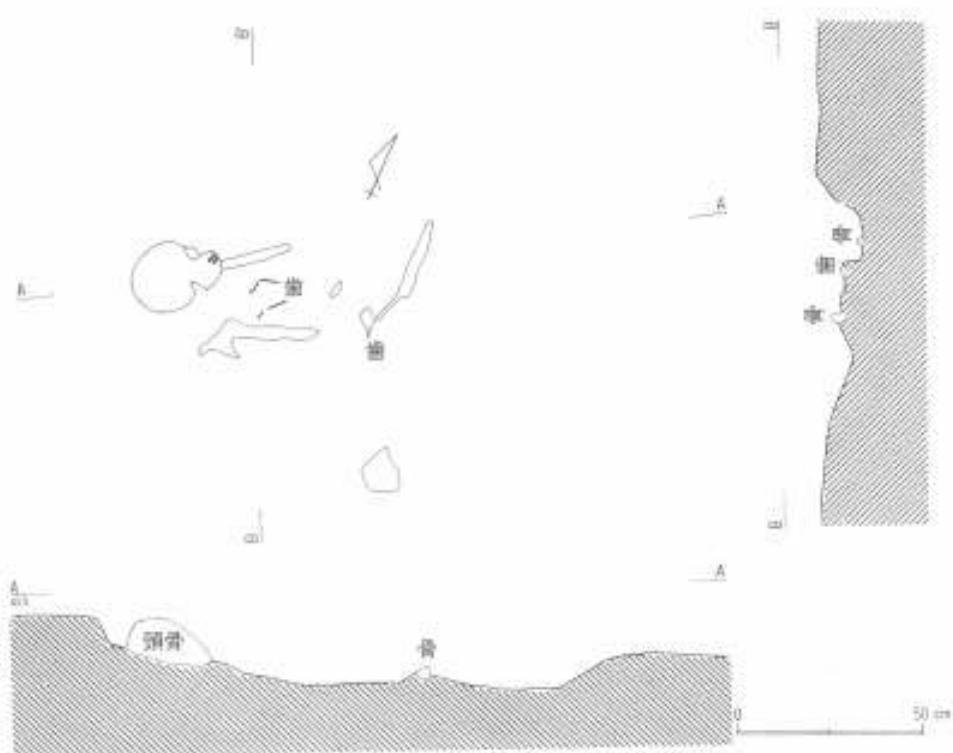
38-5-からわけ。標高43.141mから出土。口径10.2cm、底径5.1cm。器高2.6cm。中粒砂と少しの粗粒砂を含み、焼成は良好で、色調は淡黄色である。底部は



第37図 6号土葬墓出土古銭



第38図 4・5・6号土葬墓及び括出土遺物



第39図 7号土葬墓

遺物 人骨。



第40図 8号土葬墓

8号土葬墓 (第40図、図版15)

位 置 本土葬墓は、7号土葬墓の南側に検出され、土壌の掘込みが確認できず、人骨のみ検出された。

概 要 頭蓋片と肢骨片があるのみであった。

規 模 頭蓋片 $18 \times 13\text{cm}$ 、肢骨片 $10 \times 3.5\text{cm}$ 。

遺 物 人骨。

左回転糸切り離しで、完形品である。

7号土葬墓 (第39図、図版16)

位 置 本土葬墓は、6号土葬墓の南側に検出され、
概 要 土壌の掘込みが確認できず、人骨のみ検出さ
れた。

頭位は西に、頸は北もしくは東を向いて、
出土した。

規 模 人骨の東西方向の長さ75cm。

9号土葬墓 (第41・42図、図版16・24)

位 置 本土葬墓は、8号土葬墓の南へ3.6mの所
概 要 に検出された。

平面形は、隅丸長方形を呈し、長軸はほぼ
南北方向を示す。

地山の礫層を深く掘込んでいた。部分的に
袋状になっていた。

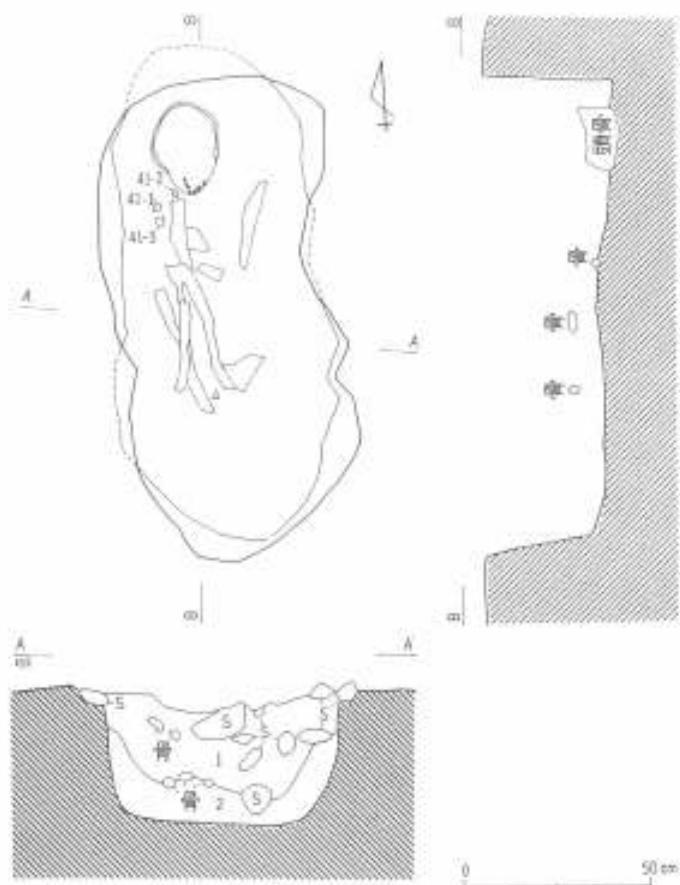
土層は、1層が褐色土、2層が暗褐色土で
あった。



第41図 9号土葬墓出土古銭

から出土した。直径 2.4 cm。銅
銭。

41-3-古銭。熙寧元宝（真書体）。
標高43,103m から出土した。直
径2.45m。銅銭。



第42図 9号土葬墓

規 模 断面A—A'の長さ0.63m、断面B—B'の長
さ1.29m、深さ0.36m。

人骨の南北方向の長さ0.83m。

遺 物 人骨、古銭3枚が出土した。

41-1-古銭。祥符元宝。標高43,102m から出土し
た。直径 2.2 cm。銅銭。

41-2-古銭。皇宋通宝（真書体）。標高42,953m。

2号火葬墓（第44・45図）

位 置 本火葬墓は、調査区の東側に位置し、5号
概 要 土葬墓の西側に検出された。

平面形は、隅丸三角形を呈し、長軸はN—
55.5°—Wを示す。

掘込みは、あまり深くないが、東南部分に
は深い所がある。

土層は、炭化物、人骨片を多く含む褐色土
であった。

規 模 長軸1.77m、短軸0.87m。

遺 物 人骨片、古銭5枚、陶器片が出土した。

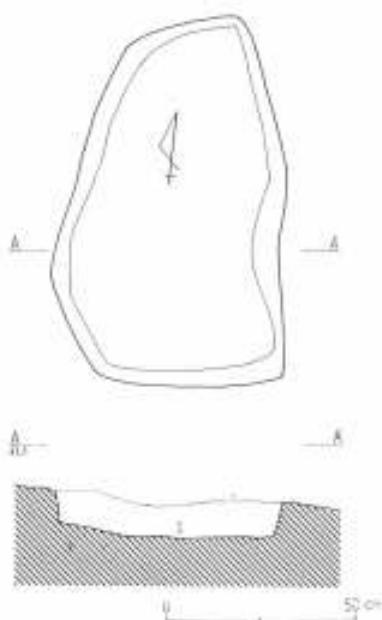
45-1-古銭。永樂通宝。標高43.321mから出土し
た。直徑2.4cm。銅銭。

45-2-古銭。永樂通宝。45-1と同じ位置から出
土した。直徑2.5cm。銅銭。

45-3-古銭。永樂通宝。45-1と同じ位置から出
土した。直徑2.45cm。銅銭。

45-4-古銭。永樂通宝。45-1と同じ位置から出
土した。直徑2.5cm。銅銭。

45-5-古銭。不明。45-1と同じ位置から出土し
た。直徑2.5cm。銅銭。



第43図 1号火葬墓

1号火葬墓（第43図）

位 置 本火葬墓は、調査区の東端に検出され、平
概 要 面形は隅丸長方形を呈す。

長軸は、ほぼ南北方向を示し、掘込みは浅
いものであった。

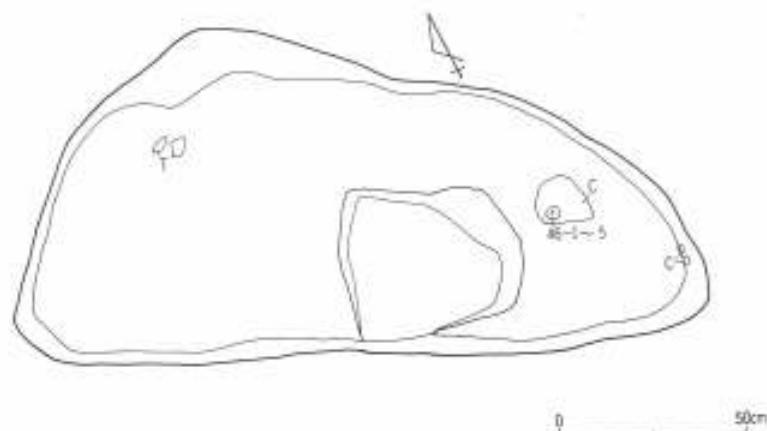
土層は、人骨片と炭化物を含む褐色土であ
った。

規 模 長軸0.98m、短軸0.61m、深さ10cm。

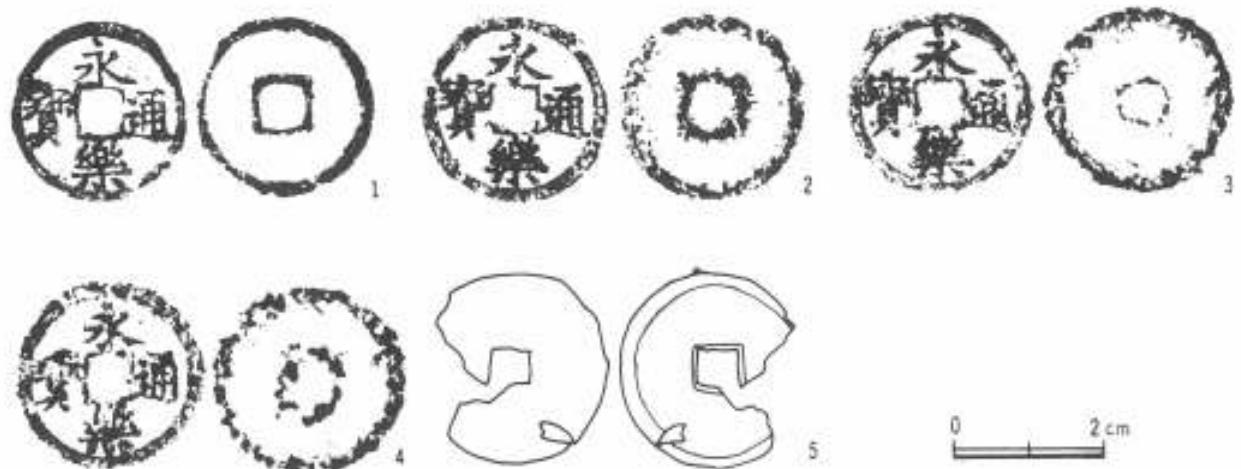
遺 物 なし。

3号火葬墓（第46図、図版16）

位 置 本火葬墓は、調査区の南西部に位置し、9
号土葬墓の西側に検出された。



第44図 2号火葬墓



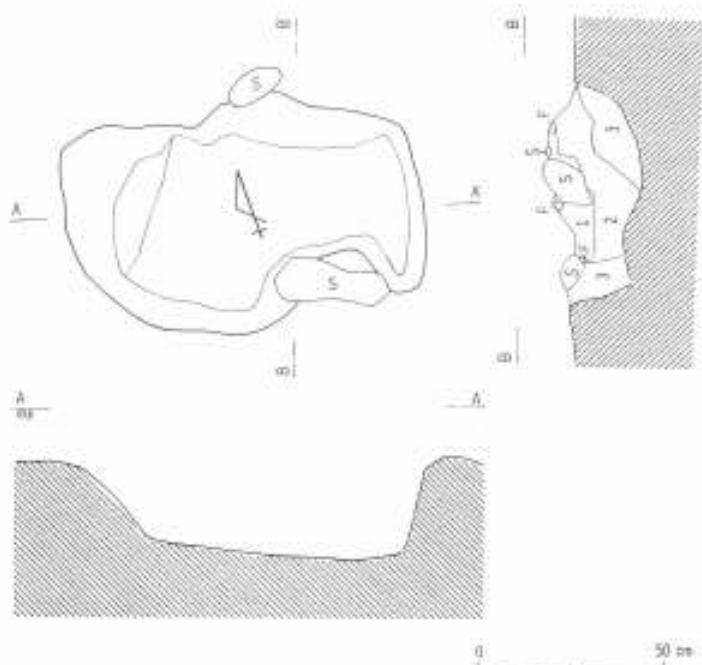
第45図 2号火葬墓出土古銭

平面形は、隅丸長方形を呈し、長軸はN—76°—Wを示す。

北辺と南辺には、細長い川原石が置かれていた。土層は、1層が褐色土(骨を多く含む)、2層が褐色土、3層が砂層であった。

規 模 断面A—A'の長さ93cm、断面B—B'の長さ60cm、深さ25cm。

遺 物 人骨片。



松原遺跡一括出土遺物（第38
図、図版24）

38-6-茶碗。口径 7.5 cm、高
台径 3.3 cm、器高 5.3 cm。
桐の葉と菊の花の文様が
描かれている。

第46図 3号火葬墓

VI. 庚申塚遺跡及び松原遺跡出土の馬歯・馬骨・人骨について

早稲田大学考古学研究室 金子 浩昌

1. 庚申塚遺跡

庚申塚の南側斜面に 8.0×2.5 m の範囲に多数のウマの遺骸が発見された。それらは天明の火山灰に覆われた土層中にあったもので、天明3年(1783)浅間山の噴火以前に埋められたものと考えられる。筆者がこれらの骨を実査できたのは、筆者に送付された時のごく一部であって、その他は写真でみたのみであった。できればそのすべてを検すべきであったがそのための時間的な余裕がなく、報告すべきスペースにも限りがあったので、別の機会に調査、報告を果したいと思っている。今回は筆者に送付された資料を中心にのべ、それによって、ここでウマの歯骨の出土状況の一端を知り得ればと考えている。計測値はmmである。

(1) ウマ埋葬遺構出土歯と骨

19-1 右下顎骨の骨体部

($P_{4,5}$ $M_1 - M_3$) を一部、もしくはほぼのこす。

	M_1	M_2	
歯冠長	12.8	26.0	エナメル質のみ
歯冠幅	2.5	14.3	
歯冠高(中央)	40.0	—	

歯冠から歯根分岐部までの高さは M_1 で 44.0 である。7~8 才位の年令である。

19-2 右上腕骨片、胸骨椎体部その他骨片が一括してあげられているものである。上腕骨は遠位端をのこすのみの破片。

19-3 右大腿骨の骨幹部のみをのこす。しかし、骨幹部も不完全品である。

19-4 左大腿骨片。骨幹部のみをのこす破片である。

19-5 右下顎骨。 $(M_1 - M_3)$ が残植する。しかし、 M_1 と M_3 は破損が著しい。

	M_2
歯冠長	20.8
歯冠幅	13.0
歯冠高など不明。	

19-6 中手もしくは中足骨の骨幹部分の破片である。

19-7 左下顎骨および左大腿骨片各1。

下顎骨には $(P_4, M_1, M_2, M_3, \text{欠})$ がみられた。

	P ₄	M ₁	M ₂
歯冠長	24.0	23.6	22.0

歯冠の磨滅はかなり強く、老令馬であったことが推定される。

19-8 中手骨骨幹部片、不完全な標本なので正確でないが、骨幹の最小径は幅径27.0、前後径19.0。

19-9 右？中手骨片、近位端部がのこるが、破損しており、左右が決められない。推定する近位端部の幅は31.0である。

19-10 右胫骨の骨幹部

19-11 上顎骨、右下顎骨と右上腕骨が一ブロックとして採取されたものである。

上顎骨

口蓋を下に向けておいた位置で出土し、左右の歯列と口蓋骨水平板までをのこす。歯は顎骨およびブロックとしてあげた土中に固定された状態にあるために計測は不能で、一部の歯のみ行った。

P²—M³の歯列長 128.0

LP²

歯冠長 33.5

歯冠幅 25.0

歯冠高 44.0

右下顎骨

P₂—M₃の歯列長 166.4

P₂ M₂ M₃

歯冠長 33.5 30.0 29.0

歯冠幅 15.1 16.0

上顎骨と下顎骨が同一の個体のものであるかどうかは不明である。いずれにしても両者はかなり原位置を動いたものとみなければなるまい。上腕骨は近・遠位両端を欠く。

19-12 上顎骨と上腕骨 上顎骨は左右がそろい、咬面を下にして置かれたような状態でのこされ、その南側に右上腕骨がみられた。上顎歯は咬面を下にして土中に埋没しているために大きさ等をみることができなかった。

19-13 左右の上顎骨、中手・中足骨、大腿骨からなるブロック。

上顎骨

仰転した形で出土している。

P²—M³ 歯列長 155.6

左右上顎骨の最大幅 111.9

P² P³ M² M³

歯冠長 36.8 27.7 23.0 26.4

歯冠幅 21.3 24.8 23.3 21.5

歯冠高 48.5

大腿骨

左右の大脛骨が少しずれて重なるようにして並ぶが、これも近位、遠位端が同じ方向に来ないで、それぞれ逆の位置にあり、これも原位置を動いているのであろう。

中手・中足骨

骨幹の一部がのこるだけの破片である。

19—14 右胫骨、下距骨 右胫骨が2点ある。近、遠位両端を不完全にしかのこさない標本である。

骨幹最小径(2標本とも) 33.2

距骨 高さ 49.0

19—15 右橈骨 数少ない完存に近い骨であるが、やはり遠位端を欠くために完全骨長は不明である。

骨幹最小径×前後径 32.0×23.0

19—16 歯および四肢骨のブロック

歯

LM³

歯冠幅 140.0

右肩甲骨片

左胫骨骨幹部

腸骨片

中足骨片

19—17 ① 歯と四肢骨がブロックをなしていたものである。

歯

LM³

歯冠長 25.5

歯冠幅 21.6

右橈・尺骨、右橈骨近位端 橈骨右側が2点ある。

骨幹部最小径×前後径 32.3×24.0

右胫骨 骨幹中央最小径 30.0

歯と四肢骨との関係は不明である。歯は磨耗が強く老令の個体と思われる。

19—17 ② 次の歯と四肢骨からなる一ブロックがある。

LP_{3, 4}

P₃ P₄

歯冠長 28.3 26.0

歯冠幅 17.3 17.8

歯冠高 * 33.0 42.0

*歯根分岐部までの高さ

歯の咬耗はかなり進んでおり、おそらく10才以上の年令になる個体のものであろう。

(2) G-4・5区出土馬歯・馬骨

4-1 右P₄ 破損

4-2 左M₁ 不完全な標本、歯冠は高くのこっているので若い個体であったと思われる。

4-3 右M₂

歯冠長 16.2

歯冠幅 13.7

歯根分岐部までの高さ53.0位はあり、5-6才までの年令であったと思われる。

(3) 庚申塚出土馬骨

6-1 右距骨 滑車部分のみを不完全ながらのこす標本である。・

6-2 右距骨 滑車部分のみをのこす破損した標本である。

(4) 庚申塚埋葬遺構出土火葬骨

13-1 人骨である。四肢骨の断片であっておそらく成人であろう。

以上の他の馬歯、馬骨については実査する機会をもたず、写真によって出土の状況をみるにとどまった。それらについては図版の説明に書いておいたので参照していただきたい。

(5) 庚申塚南縁出土の馬歯・馬骨

多数出土したウマの骨格には、50-60個位の下顎骨を含むと思われ、20-30頭位の遺骸があったのではないかと思われる。そして多分ウマのみであろうかと思われる所以であるが、全部の骨を検していないので確かなことはない。

出土したウマの骨格は埋葬後に殆どのものが動いているようであって、これは限られた墓域内に埋葬するため、先に埋めたものを片付けて次のウマを埋葬するということをしたためであろう。また、それ以外にもこの周辺に入手を加えることが多く、その都度骨が動かされたのである。そうしたこともあるて、ウマの歯、骨の保存は良くない。計測に使える資料は極めて少なかった。しかし、この遺跡のウマは上記した計測値にもみられるようにいずれも中、近世馬の特徴である、いわゆる中型馬のもので、日本の在来馬とされる木曾馬もしくはそれよりもやや小さいウマであったようである。

日本の中、近世馬の研究は、単にその時代のウマの大きさを知るというだけでなく、日本のウマの系統やさらには文化の問題にも関わる内容を含むものである。このために本遺跡のウマの遺骸は貴重な資料を提供するものと考えられるのである。

2. 松原遺跡

2号土葬墓

頭骨が土塊として取りあげられているが、形質の判明する骨をみることはできなかった。若し大きさが土塊位のものとすれば成人のものであろう。北に頭位、おそらくひざを軽く曲げた屈葬であった。

3号土葬墓

大腿骨と胫骨の破片が採取されているのみである。大腿骨の横径25.5、成人男性骨であろう。北に頭位、多分西に向いた屈葬姿勢。

4号土葬墓

大腿骨と胫骨のみをのこす10数片の破片である。大腿骨骨幹の横径23.0±、成人。
菱形に掘られた土壌中より出土している。おそらく頭位は北、大腿骨がこれに直交するように出土しているので、かなり強くひざを曲げた屈葬であったろう。やはり西を向いていたと思われる。

5号土葬墓

大腿骨2片、胫骨2片を得ている。大腿骨骨幹の幅は25.0±、成人。
扁平、楕円形、長径約1mの土壌である。北に頭位をもつ、長骨が土壌軸に平行して出土しているのでひざを立てた屈葬ではなかったかと思われる。

6号土葬墓

頭骨と骨盤、大腿骨を得ている。
頭骨は縦に半分をのこして、片側弓が全く腐食し去る。頭蓋は長頭を思わせる長さをもち、鼻根の陷入を全くみることがない。眼窩上の隆起はやや強い。歯咬耗は強く進む。
寛骨の大坐骨切痕は約70°に開き、女性を思わせる。大腿骨の骨幹部幅は25.0である。
頭位を北、顔は東を向け、股関節及びひざ関節を強く曲げる屈葬姿勢であった。

7号土葬墓

長径120、短径60cmの扁平楕円形の土壌中に埋葬されている。西に頭位、北もしくは東を向く。
頭骨は表面の腐食が強いがほぼ原形を保つ。歯の咬耗は殆どみられない。眼窩上の隆起は弱い。肢骨は上腕骨、尺骨と思われるやや細い骨と胫骨がある。

8号土葬墓

頭蓋片を土塊中にとりあげているので、他に僅かな肢骨片があるのみである。土塊に下頬歯が付着していて、下頬骨のあったことがわかる。
歯は右M₁、歯冠長12.6、歯冠幅12.3、咬耗は殆どみることがない。若年成人。

9号土葬墓

長径1.2m、短径55cmの隅丸長方形の墓壙に埋葬された人骨が出土している。

頭位は北に向かって仰臥、股関節、ひざ関節を曲げての屈膝姿勢であった。

頭骨は右側の半分に骨質がのこるが、そこにみられた冠状縫合にはゆきが殆どみられず若年であることが推測される。頭型はやや長い形であると推測した。歯牙の咬耗はごく僅かにみられるのみである。M₁の萌出を確かめることはできなかった。

主要四肢骨は発掘時におおよそを確認したようであるが、保存が悪く、とりあげられているのは、上腕骨、大腿骨、胫骨などに限られた。大腿骨骨幹の幅は26.4である。成年男性と思われる。

3号火葬墓

一辺35cm程の方形に掘りくぼめた土壙から火葬骨が30片あまり出土している。頭骨の一部とその他は肢骨片である成人骨。

埋葬墓と人骨の特徴

本遺跡からは9基の土葬墓と3基の火葬墓を検出している。9基の土葬墓はすべて北に向けて掘られ、頭を北に置いていた。墓壙は小さく、長さが1.2m程であり、腕、脚を曲げるようにして埋葬したようである。すべて成人骨であったが、老年と断定できる骨格はなかった。性別を判定するためには骨の保存が悪く、確認することはできなかった。頭骨をのこす個体は数例のみであったが、長頭的な頭型が注目された。

VII. まとめ

今回の調査によって、庚申塚遺跡と松原遺跡の2遺跡が調査された。

庚申塚遺跡は、庚申塚1基、馬埋葬遺構1基、土壙8基が検出された。

庚申塚は、県道岡部・熊谷線の南側に接し、延宝8(1680)年の庚申塔が建立されていた。発掘前の地形測量図(第3図)を見ると、塚の西側の等高線が乱れているが、その部分が駐車場として使用されていたため、等高線が乱れてしまったものと思われる。塚の頂上には、庚申塔とともに集石遺構もあり、半分欠損している石臼(9-1)も置かれていた。

トレント調査によって、庚申塚及びその周辺に天明3(1783)年の火山灰を多く含む層(第7図-3層)が検出され、一様に堆積していた。このことにより、庚申塚は天明3年以前に構築されたことが考えられ、3層まで掘り下げるにより、構築当時と思われる形を発掘した。その結果、方形を呈し、川原石を使用して二段に築かれ、南辺7m、西辺6m、高さ1.25mを測る塚であることがわかった。

塚を掘下げていく段階で、馬骨(6-1・2)等が出土して、塚の中心部からは埋葬施設が検出された。埋葬施設は、長楕円形の土壙と、その周間に検出された焼土部分からなる。土壙は長軸2m、短軸0.66m、深さ0.31mを測り、古銭・かわらけ・小皿・骨・炭化物が出土した。土壙の周間に検出された焼土部分からも、古銭・かわらけ・小皿・骨・炭化物が出土した。これらの遺物は、二次的な火を受けており、骨は火葬人骨であった。

以上のことから、埋葬施設は火葬場であり、火葬墓でもあると考えられる。出土遺物は、人骨を焼くとき、一緒に副葬されたと思われる。古銭が、土壙の西側から検出されず、ほとんど土壙内の東側から出土している点も興味深い。

庚申塚の西側裾部から土製人形（第11・12図）が集中して検出され、頭部が5点出土し、少なくとも5体以上の人形が置かれて、供養等が行われたものと思われる。

庚申塚の埋葬施設から出土した小皿は、17世紀前半と考えられ、庚申塔は延宝8（1680）年の年号をもつていた。17世紀前半に火葬墓がつくられ、その上に塚が築かれた後に、庚申塔が建てられたのであろう。

馬埋葬遺構は、庚申塚の南側に検出され、長軸8.6m、短軸3.1m、深さ0.81mを測る。上層からは、菊皿、寛永通宝、包丁、播鉢等が出土し、下層から馬歯・馬骨が多量に出土した。第9図のB-B'断面の観察によれば、5～8層に火山灰が多く含まれており、この火山灰は天明3（1783）年のものであるので、天明3年以前に馬が埋葬されていたことが考えられる。

馬歯・馬骨は、埋葬遺構の東側に多く集中し、中央部の北側と南側、西側部分の北側と南側にも集中がみられた。金子浩昌氏が先に述べられているが、馬の骨格はほとんどのものが動いているようであって、この埋葬遺構という墓域の中に埋葬するために、先に埋めたものを片付けて次の馬を埋葬したためであろう。

庚申塚の積石の中からも、上述したように馬骨が出土しており、塚が築かれる前から馬はこの地域に埋葬されていて、塚を築く際に、馬埋葬遺構の位置の川原石を掘って積上げたものであろうか。又は、馬が大量に死んで埋葬するために、大きな土壌を掘り、馬の供養のために塚を築いたのであろうか。

もし、後者の考え方の場合、馬の供養のためであったなら、庚申塔ではなく馬頭観音を建てたと思われ、人骨の検出された庚申塚の埋葬施設である火葬墓との関連がむずかしいと考えられる。

松原遺跡は、土葬墓9基、火葬墓3基が検出された。発掘調査前の地元の人達の話では、「馬捨て場」であるというので、1辺12.5m、高さ0.75mの方形の塚の調査を実施したが、ビン・茶碗・バケツ・ふとんなど最近のものがだいぶ出土したので、塚の調査を打切って、塚の南側の調査を行い土葬墓・火葬墓が検出された。

この塚の北西部には、馬頭観音が建てられており、「馬捨て場」であった可能性が高いと思われる。ただ、最近までの不燃物等のゴミ捨て場になってしまったことにより、調査が困難になったものと考えられる。

土葬墓は、川原石が土壌内及び土壌上まで置かれていた1号土葬墓、川原石が土壌上に置かれていた4・5号土葬墓、川原石が置かれていないかったと考えられる9号土葬墓、土壌が確認できず人骨のみ検出された2・3・6～8号土葬墓の4タイプに分けられる。

年代的には、どのタイプの土葬墓も、ほぼ同時期と思われ、4・5号土葬墓から出土した小皿等の年代から17世紀前半と考えられる。この小皿は、庚申塚の埋葬施設から出土した小皿と同じものと思われ、庚申塚と土葬墓がほぼ同時期につくられたと考えられる。

火葬墓は、2号火葬墓から遺物が出土しただけであったが、16世紀と考えられる菊皿が検出されており、土葬墓より年代が古いかと思われる。

今回の調査によって、江戸時代初期の庚申塚・馬埋葬遺構・土葬墓が検出され、当時の民間信仰・墓制・馬に対する思想、馬自体の研究にとっての好資料が得られたと思う。

三尻遺跡群 庚申塚遺跡・松原遺跡
写 真 図 版

図版1



庚申塚・松原遺跡航空写真

図版2



夷申塚遺跡航空写真



1. 庚申塚遺跡遠景（西側から）



2. 庚申塚遺跡遠景（南側から）

図版4



1. 戊申塚遺跡



2. 戊申塚・馬埋葬遺構



1. 庚申塚

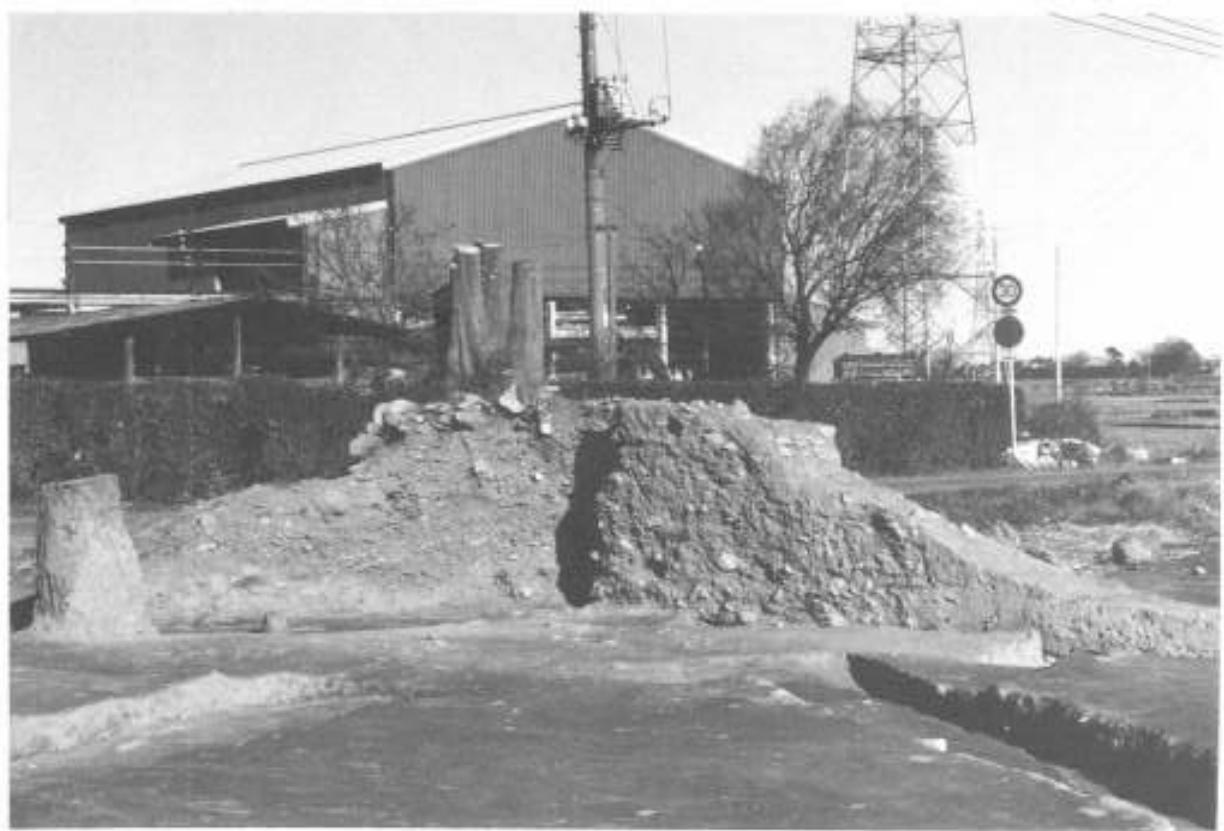


2. 庚申塚

図版6



1. 庚申塔



2. 庚申塚

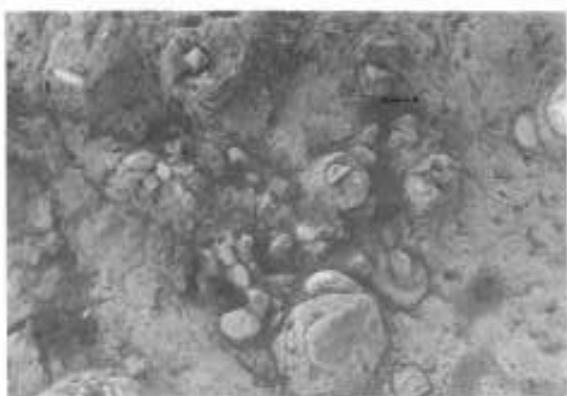


1. 庚申塚埋葬施設



2. 馬逕跡遺構

図版 8



1. 土製人形出土状態



2. 土製人形 (12-2)



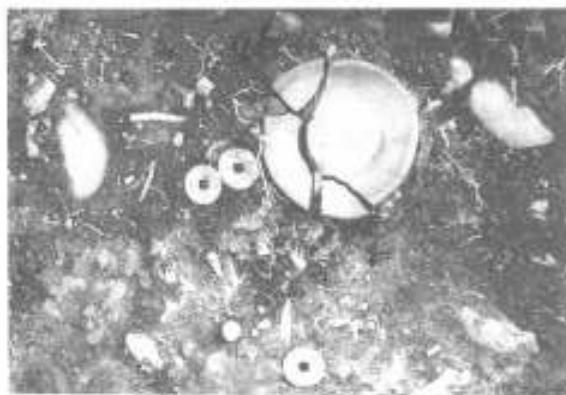
3. 土製人形 (12-1)



4. 煙管 (9-7)



5. 庚申塚埋葬施設出土遺物 (14-1+4+5+7+12,
15-2+7+11)



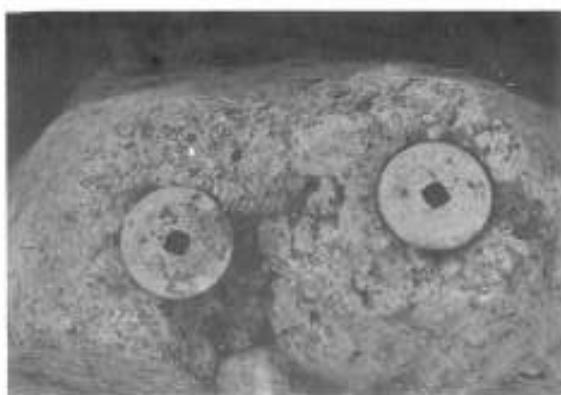
6. 庚申塚埋葬施設出土遺物 (14-9, 15-5)



7. 庚申塚埋葬施設出土古錢 (15-3+8)



8. 庚申塚埋葬施設出土土器 (14-8)



1. 馬埋葬遺構出土遺物 19-120・121



2. 馬埋葬遺構出土遺物 19-122



3. 馬出土状態 19-114-119 (西側から)
左下顎骨と肢骨



4. 馬出土状態 17-2, 19-123-130 (東側から)
手。中足骨を主とする肢骨群



5. 馬出土状態 19-140-152 (西側から)
左下：右下顎骨、右上：上顎切歯列



6. 馬出土状態 19-140-145 (南側から)
中央：右下顎骨と肢骨群



7. 馬出土状態 19-1 (北側から)
右上：右下顎骨、左：上腕骨その他



8. 馬出土状態 19-1 (北側から)
右下顎骨の内側

図版10



1. 馬出土状態 19—3 (西側から)
中央左下顎骨と肢骨



2. 馬出土状態 19—142・145～150 (北側から)
中央下に右下顎骨と上に肢骨群



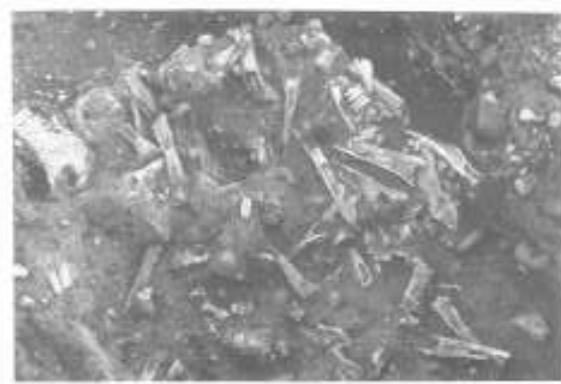
3. 馬出土状態 19—3 (西側から)
右大腿骨



4. 馬出土状態 19—5～13 (南側から)
上顎骨4、下顎骨1と肢骨が集中する



5. 馬出土状態 19—11・12 (南側から)
4の中央部アップ



6. 馬出土状態 19—17 (西側から)
左端に右下顎、右上に左下顎骨、その周囲の四肢骨群



7. 馬出土状態 19—17 (北側から)
6の右寄上部をアップ。左上顎骨と肢骨片



8. 馬出土状態 19—131～139 (南側から)
中央に右下顎骨、周囲に肢骨群



1. 馬出土状態 19-26・28・29・33-30 (北側から)



2. 馬出土状態 19-112・113 (西側から)



3. 馬出土状態 19-60-62・64-74・78-90 (北側から)
1の中央やや上をアップ、左に右下顎、右下に左右割れた上顎骨



4. 馬出土状態 19-112
左上顎骨



5. 馬出土状態 19-11-13 (北側から)
中央：左に右上顎骨、右に左下顎骨



6. 馬出土状態 19-18-32 (東側から)
5の右上顎骨と左下顎骨が中央左に上下顎に見える



7. 馬出土状態 19-28・33・34 (東側から)



8. 馬出土状態 19-25・27・30-32 (東側から)
6の中央左上の下顎骨と歯骨

図版12



松原遺跡航空写真



松原遺跡遠景（北側から）



松原遺跡全景（西側から）

図版14



1. 1号土葬墓



2. 1号土葬墓



3. 2号土葬墓



4. 3号土葬墓



5. 3号土葬墓



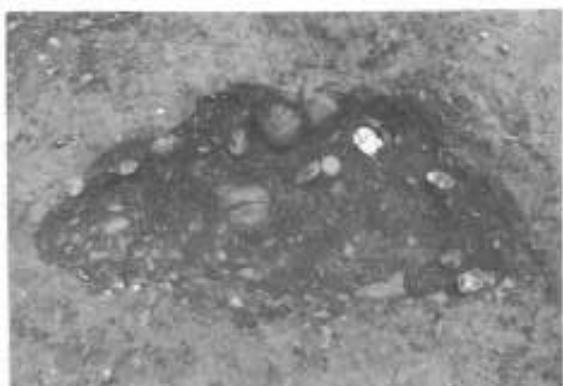
6. 3号土葬墓



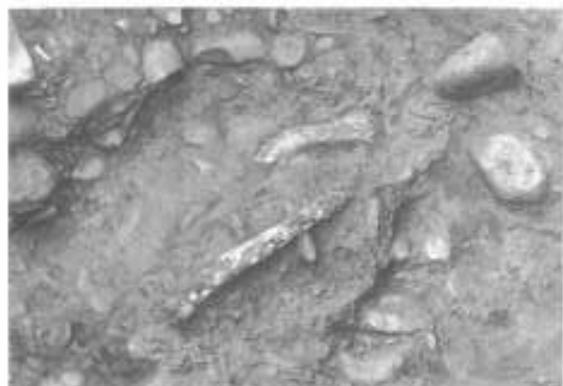
7. 4号土葬墓



8. 4号土葬墓



1. 5号土葬墓



2. 5号土葬墓



3. 6号土葬墓



4. 6号土葬墓



5. 6号土葬墓



6. 6号土葬墓



7. 6号土葬墓

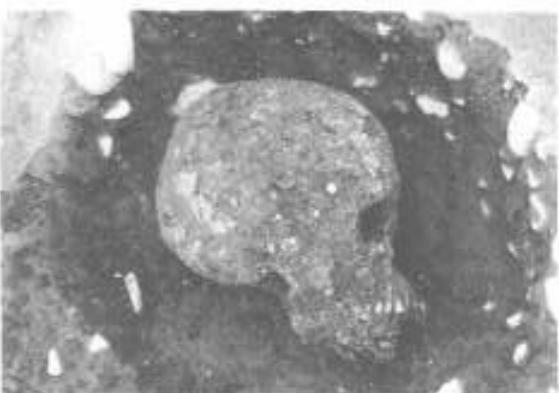


8. 8号土葬墓

图版16



1. 7号土葬墓



2. 7号土葬墓



3. 7号土葬墓



4. 7号土葬墓



5. 9号土葬墓



6. 9号土葬墓

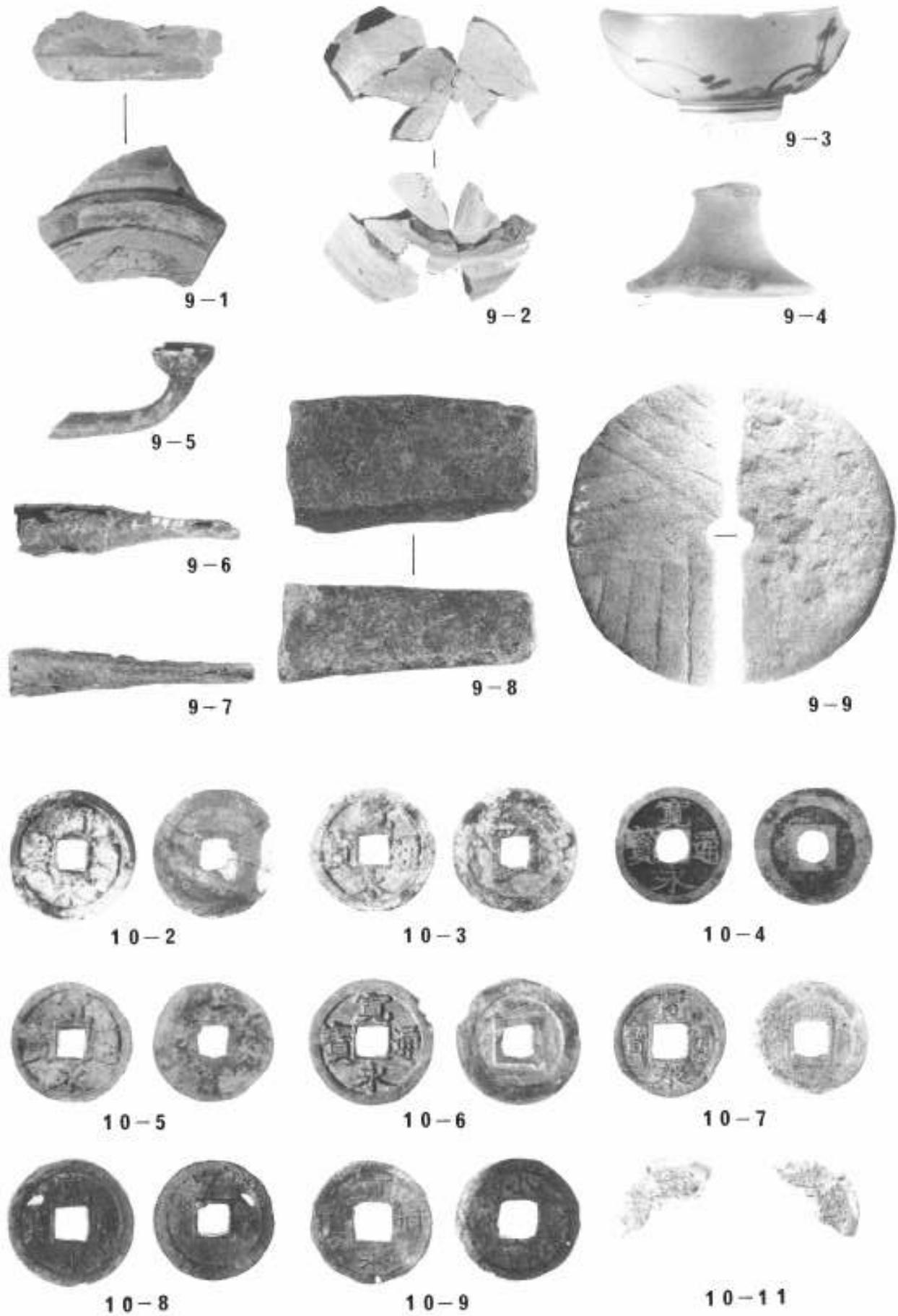


7. 9号土葬墓

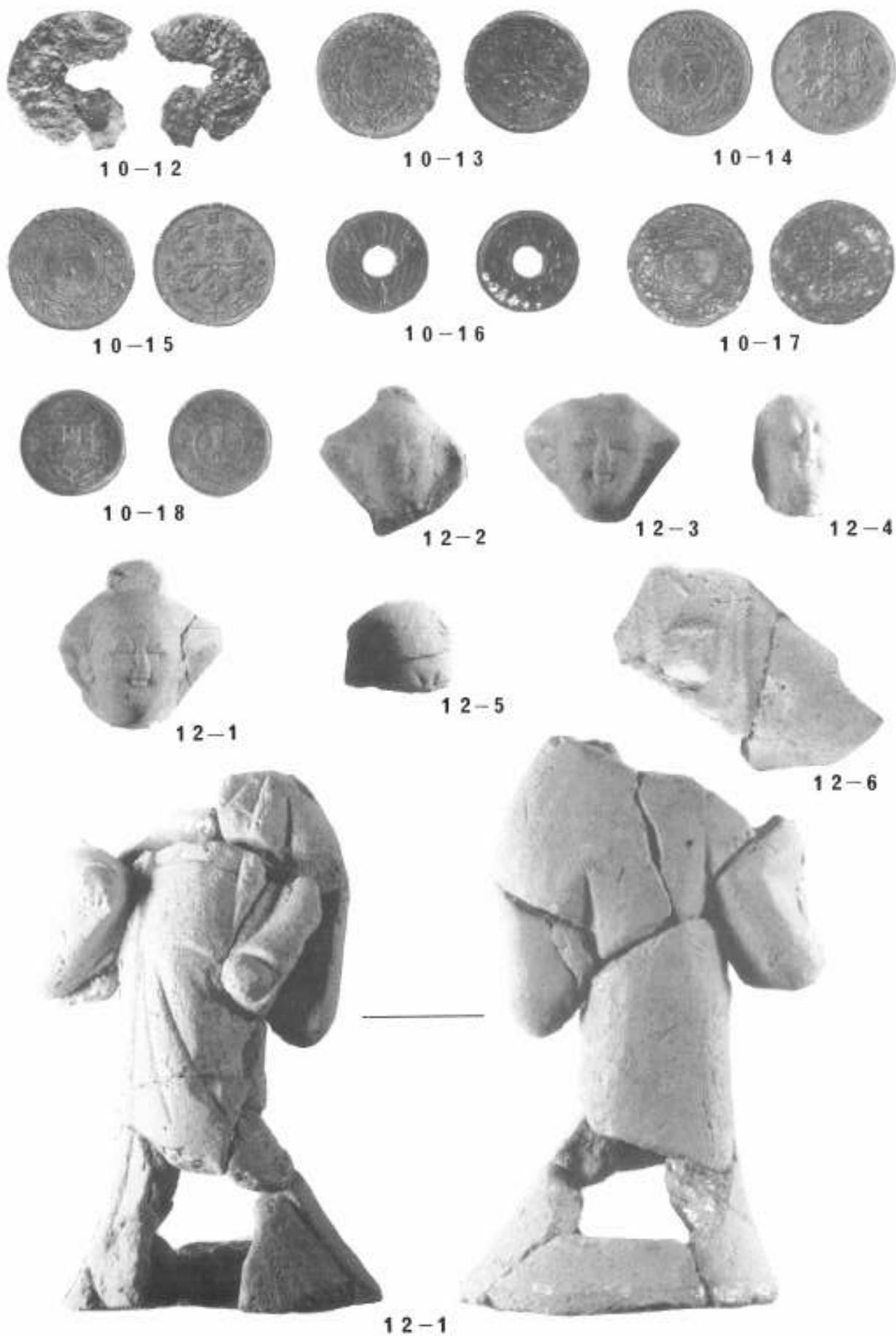


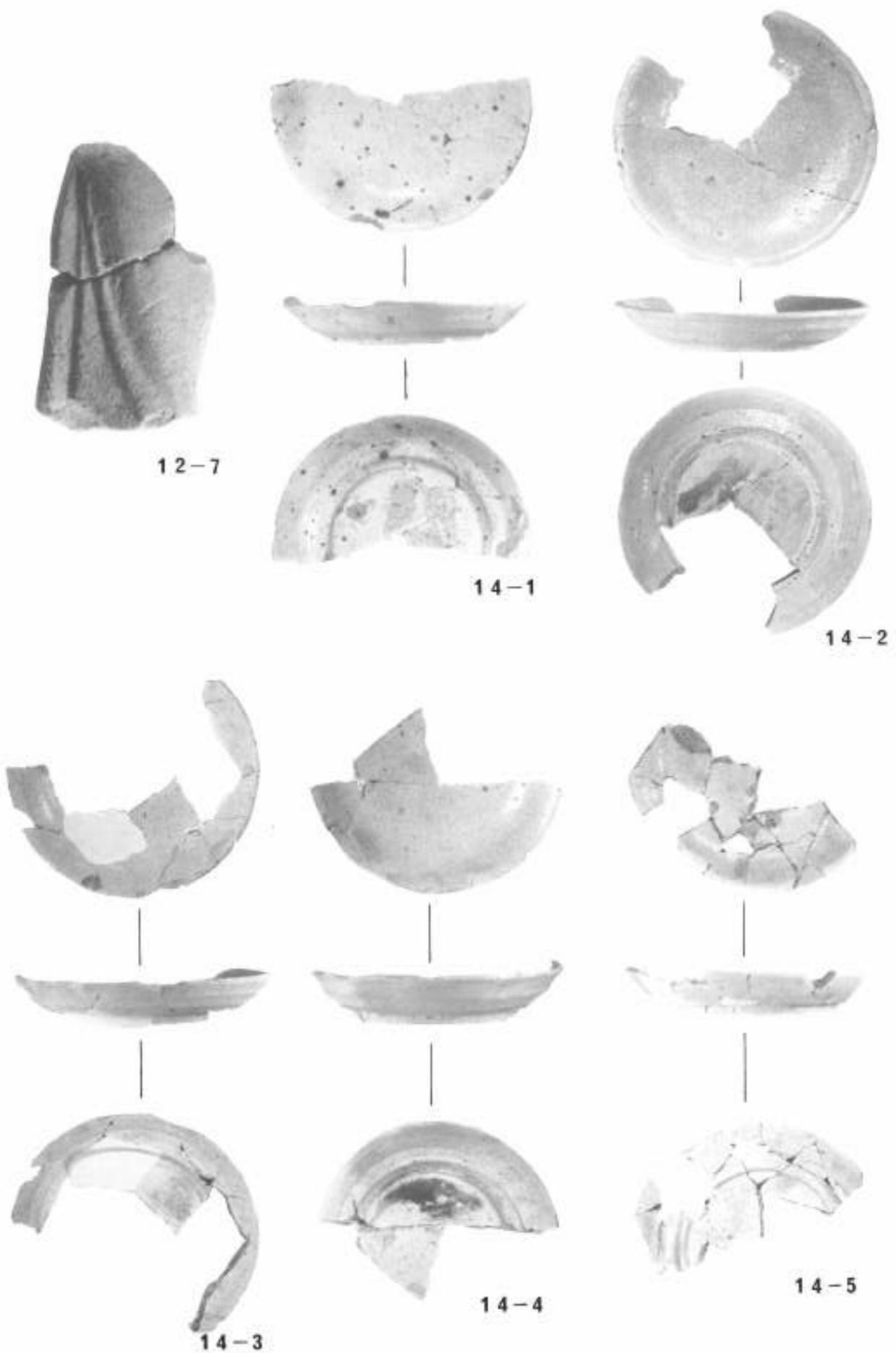
8. 10号土葬墓

図版17

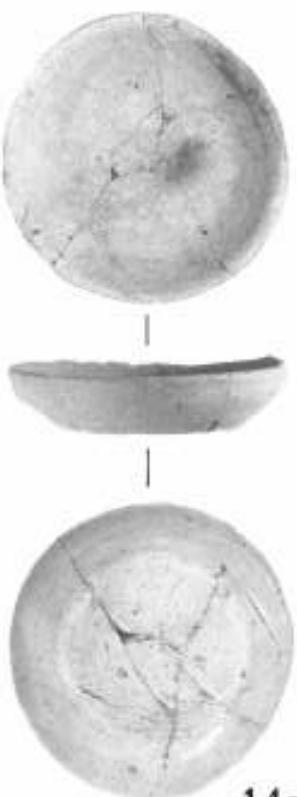
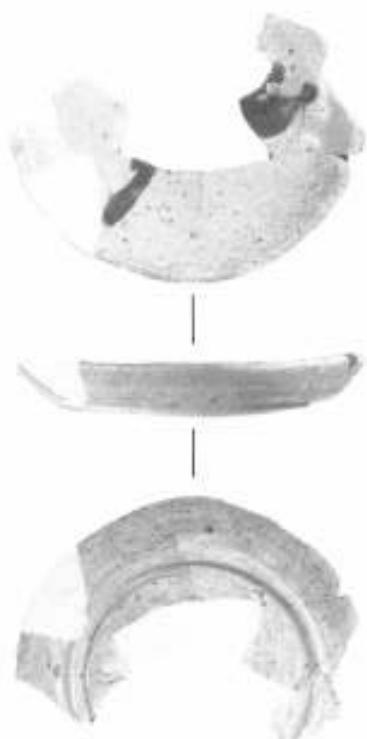
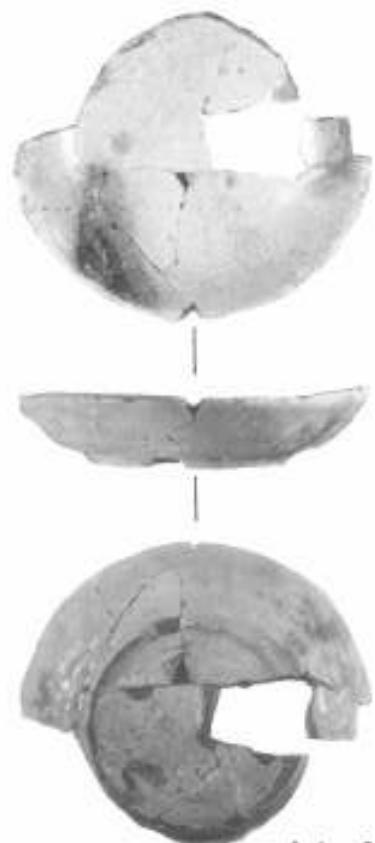


図版18





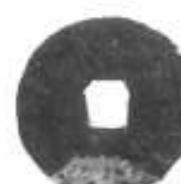
図版20



15-1



15-3



15-5



15-7



15-8



15-9



15-10



15-11



15-12



15-13



16-1



16-2



16-3



16-4



16-5



16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11



16-12

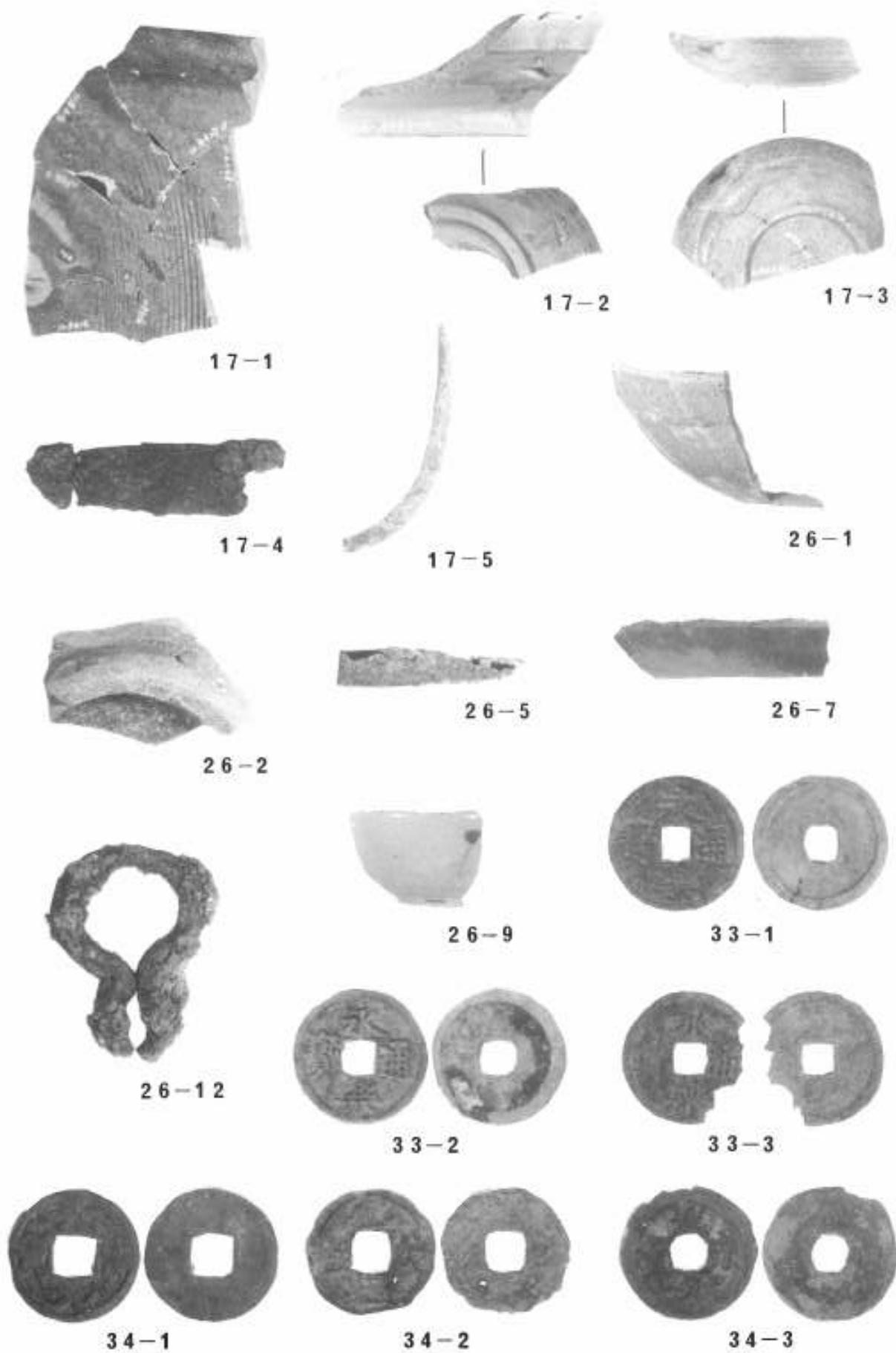


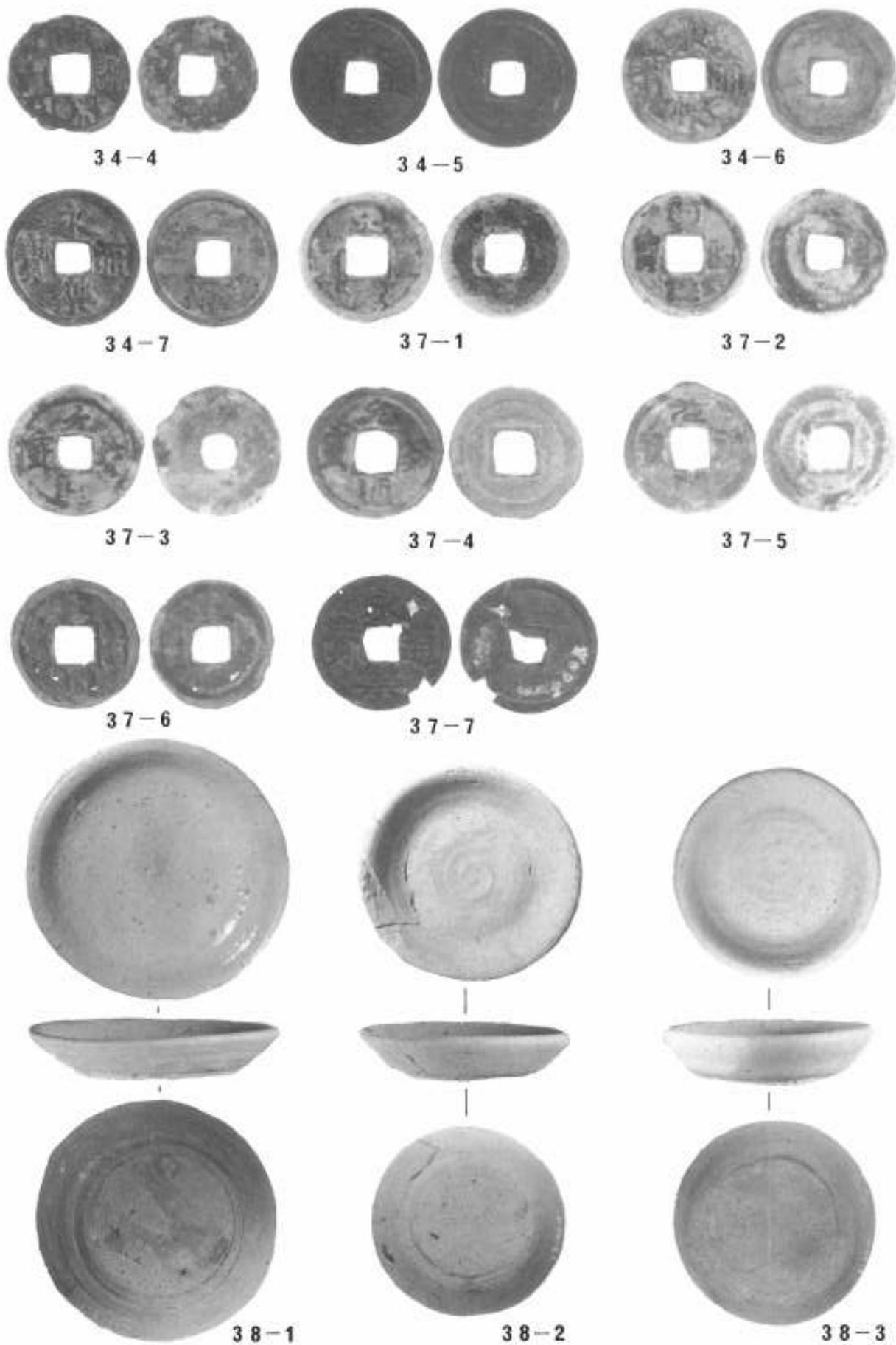
16-13



16-14

図版22



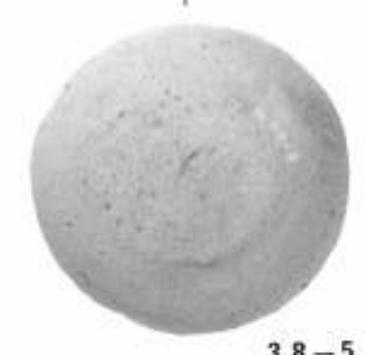




38-6



41-1



38-4

38-5



41-2



41-3



45-1



45-2



45-3



45-4



45-5

昭和62年3月発行
昭和61年度 熊谷市埋蔵文化財調査報告書

三尻遺跡群 庚申塚遺跡・松原遺跡
編集発行 埼玉県熊谷市教育委員会
印 刷 株式会社 博 文 社
